

イスラーム信頼学

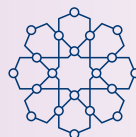
News Letter No.04

2024



巻頭特集1 .. 「イスラームからつなぐ」
刊行によせて

巻頭特集2 .. 2023年度イスラーム信頼学全体集会 シンポジウム
いま、地域から「豊かな食」と
「つながり」を考える



イスラーム信頼学

Islamic Trust Studies

04……………巻頭言

大きな変化の
波に抗して
ますます重要になる
プロジェクトの戦略知
——黒木英充

05……………巻頭特集

特集1：「イスラームからつなぐ」
刊行によせて

特集2：2023年度全体集会
『いま、地域から「豊かな食」と
「つながり」を考える』



11……………イスラーム信頼学エッセー

12……1 ガザ紛争と国際法への信頼
——沖 祐太郎

14……2 ラフン契約で家を借りれば
——岩崎葉子

16……………フィールドでつなぐ・つながる
インタビューが「うまくいく」とき
——飛内悠子

18……………新刊紹介『デジタルヒストリーを实践する』
——長野壮一

19……………〇〇に埋め込まれた信頼

20……1 寄進文書に埋め込まれた信頼
——五十嵐大介

22……2 「ムーミン」に埋め込まれた信頼
——中西竜也





- 24……………**A03シビルダイアログ**
古くて新しい土葬をめぐる現場から
——岡井宏文
- 25……………**シビルダイアログ・キャラバン**
信頼学×保育園×カフェ：
世界のつながりを「自分ごと」にするには
——太田(塚田)絵里奈
- 27……………**シビルダイアログ・キャラバン**
シビルダイアログ・キャラバンへの参加を通して
——本田直美
- 28……………**研究の最前線1**
歴史ネットワーク分析の可能性を探る (?)
——篠田知暁
- 30……………**研究の最前線2**
ロヒンギャ史研究の最前線
——池田一人
- 32……………**研究の最前線3**
戦争と食糧
「有事」を煽ることなく、大切な「平時」を守るには
——井堂有子
- 34……………**教えて！守田さん**
多宗教からなる都市の近隣関係
——守田まどか
- 35……………**教えて！荒井さん**
情報の結節点としてのアラビア語史書を読む
——荒井悠太
- 36……………**第3回イスラーム信頼学 国際会議**
“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and
Connectivity amidst Predicaments” (Mar. 1-3)
——石井正子
- 38……………**各班の概要と活動**
(A01, A02, A03, B01, B02, B03, C01)
- 52……………**2023年度の活動報告**
- 58……………**執筆者プロフィール**
- 59……………**編集後記**

大きな変化の波に抗して

ますます重要になるプロジェクトの戦略知



領域代表

黒木英充

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
北海道大学スラブ・ユーラシア
研究センター（併任）

本プロジェクトも残すところ1年となりました。2023年に行われた中間評価では「A（研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる）」の評価をいただきました。各班代表者・研究分担者・事務局の皆様をはじめ関係する皆様のご尽力のおかげです。どうもありがとうございました。

さて、1年前の巻頭言で「さらに大きな変化の波に直面するかもしれません」と申しました。2023年度の後半6ヶ月間におけるパレスチナ、とりわけガザをめぐる状況は、単にイスラームや中東に関わる研究者だけでなく、世界中の人々にとって巨大な試練となっています。そして天災とはいえ2024年元日から能登地方でガザと同じような光景を目にするとはいえ

コネクティビティと信頼構築という私たちのテーマは、この状況の中で重要性が一層増しています。パレスチナでついにこの規模で火を噴いた積年の問題については、欧米主要国政府の露骨な二重基準だけに目が行きがちですが、研究・教育の領域にも深刻な影響が及んでいます。キャンパスで学生たちが上げた声をめぐり、ペンシルバニア州立大学、マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学の学長たちが議会に呼び出され、反知性（主義）的議員の無礼な査問に対し、ひたすら防御するのみで、結局全員が辞任することとなりました。

これは学問・言論の自由に対する挑戦の氷山の一角です。

一方、南アフリカ政府は当初から極めて理性的で的確な分析と提言を公表し、イスラエルの度を越えた殺戮について、国際司法裁判所にジェノサイドとして提訴しました。私たちのプロジェクトはイスラーム文明の1400年の歴史の中にコネクティビティと信頼構築の知恵（戦略知）を見つけようとするものですが、まさに「文明」のとらえ方をめぐり、人類は大きな曲がり角を迎えているように見えます。

「シリーズ イスラームからつなぐ」もいよいよ各計画研究班が中心となった巻の刊行に移ります。私たちの研究のもつ意味を再度確認しながら、残り少ない時間を駆け抜けましょう。



ベイルート郊外レバノン国防省敷地内にある「平和の希望」Espoir de Paixモニュメント。レバノン内戦（1975-90年）の終結を記念したフランス系アメリカ人芸術家アルマンArman（Armand Fernandez, 1928-2005）の作品。レバノン政府から提供された戦車や軍用車のスクラップをコンクリートで囲めたもの。1995年完成。パレスチナ/イスラエルで同じものが造られる日が早く来ることを願う（2009年8月、筆者撮影）。



特集1：「イスラームからつなぐ」
刊行によせて

特集2：2023年度全体集会
『いま、地域から「豊かな食」と
「つながり」を考える』

巻頭特集

今号の巻頭特集では2本の特集企画をお届けする。1本目は、シリーズ「イスラームからつなぐ」刊行開始を記念する企画であり、2本目はイスラーム信託学全体集会の報告記である。以下にそれぞれの概要を記す。

最初の特集企画では、2023年3月に刊行されたシリーズ第1巻『イスラーム信託学へのいざない』の編者である黒木英充・後藤絵美両氏へのインタビュー、そして同年7月27日に紀伊國屋書店新宿本店にて開催された刊行記念トークイベント「つながりと信託から世界を見つめなおす～「イスラームからつなぐ」シリーズを読む～」の報告記をお届けする。

編者インタビューでは、シリーズの特徴やねらいから、企画時の裏話、苦労話に至るまで、率直な回答を頂戴した。本インタビューからは、研究成果の社会発信、いわば学术界と社会の「つながり」を強く意識する同シリーズの姿勢が垣間見える。

トークイベントでは、黒木氏がシリーズ全体にかんする解説、そしてシリーズ編者に名を連ねる野田仁氏・熊倉和歌子氏が各々の担当する巻を中心にトークを行った。会場のアカデミック・ラウンジでは参加者とスピーカーの距離が近く、学会での肩肘張った研究報告とは異なる和やかな雰囲気であったことが窺える。こうした企画もまた、成果の社会発信の一環として有意義なイベントといえる。

二つ目の特集企画では、2023年11月18日に開催された2023年度イスラーム信託学全体集会『いま、地域から「豊かな食」と「つながり」を考える』の報告記をお届けする。今年度の全体集会はCOVID-19流行以降はじめて完全な対面形式での開催となったが、イスラーム信託学プロジェクト関係者と一般の参加者を併せて70名以上が参加した。基調講演と4本の報告では「共食」や食糧危機といった観点から、アジアや中東の豊富な事例と多岐にわたる論点が提示され、食文化と「つながり」のありかたをめぐって実りある議論が行われた。

文責：荒井悠太

「イスラームからつなぐ」 刊行インタビュー



「イスラームからつなぐ」シリーズ第1巻の刊行にあたり、シリーズのねらいや意義について、編者の黒木英充氏・後藤絵美氏へのインタビューを行いました。



黒木英充

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所/
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（併任）

—— 第1巻を他の巻と異なるスタイル（です・ます調）にしたことや「イスラーム信頼学」プロジェクト終了後の成果報告としてではなく、プロジェクトの進行と「イスラームからつなぐ」シリーズの刊行を並行して進めていることにはどのような理由やねらいがありますか。

黒木：2021年6月に、プロジェクトの研究班代表のうち編集・出版担当の近藤信彰さん、野田仁さんと一緒に東京大学出版会を訪ねて、編集者の山本徹さんに企画についてご相談しました。その時に、これまで山本さんが学術書シリーズを手がけられるなかで、どれか1巻を、プロジェクト内容を徹底的に噛み砕いて社会への発信に充てたいという話が出たことがあったけれども、結局実現したことがない、と聞きました。その場で「それ、やってみましょう」ということで、です・ます調で、大学入学直後の学生さんを想定して書きましょう、となりました。プロジェクトと並行して進めているのは、科研費を使うという予算上の理由です。執筆をお願いした方々には驚かれましたし、COVID-19のために海外調査の結果を反映させられないといったハンディはありましたが、皆さんこれまでの蓄積がある方ばかりですし、早めに形にすることを意識して「考えながら走る」こともあってよいかと思った次第です。もちろん、若い研究者が多く参加している

ので、このプロジェクトを終えてからさらに新たな企画が生まれるかもしれません。それも期待したいです。

—— 「イスラームからつなぐ」シリーズを通じて伝えたいことは何でしょうか。

黒木：第1巻の趣旨から、シリーズ名もコネクティビティといった用語を使わずに「イスラームからつなぐ」という柔らかいものになりました。私たちの日常の身の回りのこととしてイスラームやムスリムのことを考えていただきたい、というメッセージになります。と同時に、これはイスラームに限らないのです。排外的な物言いや、今の自分にとって良ければそれで良いという考え方は、私たちの周りに満ちています。日本に限りません。そうした意見に基づいた政策を組めば一定の支持が得られるとか、さらにはこのような見方を煽って過激にすることで支持を広げようとか、考える人々もいます。でもそれは近い将来に私たちの社会を大変な困難に陥れることになるでしょう。もはや日本は経済大国ではありません。人々の多様性を認めつつ価値を共有する社会を作っていく限り、将来的な社会の存続すら危うくなると考えています。極端なことを言っているように思われるかもしれませんが、2023年秋からパレスチナで激化している悲劇は、その行き着く先の最悪の状況を身をもって示してくれている、と考えるべきだと思います。何も難しいことはありません。基本的な知識を得たうえで、これまで人々が

経験してきた「つなぎ方」の上手なところ、知恵を学んでみましょう、ということなのです。研究者も含めて私たちは知らず知らず見逃していることがあるかもしれません。社会の中ですでに意識的に実践している人たちに対する見方も変わると思います。繰り返しますが、イスラームはそのための手がかりの一つです。ただし、とても大事な手がかりなのです。

後藤絵美

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

—— 一般社会へのイスラームに関する知識の普及について、他の専門書や地域研究叢書シリーズなどと比べた「イスラームからつなぐ」シリーズの特徴はありますか。

後藤：「イスラーム信頼学」プロジェクトは2020年に始まりましたが、私が関わったのはアジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）に着任した2021年度からでした。立ち上げ時の議論を聞き逃した状態だったので、当初はプロジェクトの目指すところを把握できているのか不安でした。しかし、結果的に「イスラームからつなぐ」シリーズの第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』の編者の一人になれたことで、その不安は払拭されました。この本の序章（黒木英充「イスラームから考える「つながりづくり」と「信頼」」）には、なぜイスラームやつながりに注目するのか、コネクティビティや信頼という言葉を用いる意図やそれらが果

たす役割についての丁寧な説明があります。そして各章には、「計画研究班」と呼ばれるテーマ研究のチームを率いる方々の文章があり、本書全体を通してプロジェクトのエッセンスが見えてくるからです。これ一冊で「イスラーム信頼学」の輪郭を知ることができるというか、地図を持ってその入口に立つことができるという感じです。

「イスラーム信頼学」の特徴は、点や面ではなく、線に注目することでしょうか。出来事や運動を描くにしても、その中にいるアクターと、かれらから延びていくつながりの「線」に焦点をあてます。主役の動きにフォーカスをするというよりも、主役が、誰とどのように関わっているかがポイントになります。そうした、これまでにないスポットライトのあて方が、他のイスラームの専門書や地域研究叢書シリーズとは違うのではないかと思います。

——「イスラームからつなぐ」シリーズの企画、編集の過程でとくに重視したことや苦労したことはありますか。

後藤：私は、他の皆さんより少し遅れて

「イスラームからつなぐ」の第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』の執筆や編集に加わったのですが、原稿の執筆や、その後の編集作業の時間が限られていることが大変だったように記憶しています。執筆者の皆さんが短期間での執筆や校正に協力してくださったこと、東京大学出版会の山本さんが編集作業に力を注いでくださったこと、そして黒木さんや野田さんのふんばりのおかげで、予定通りに刊行することができました。作業をしながら、いつにない「勢い」というか、引っ張られるような力を感じたのですが、これは「イスラーム信頼学」プロジェクトの中での、人と人の「つながり」の為せるわざだったのかもしれない。

第1巻を編集する過程で重視したのは、アクター同士の関係性を単純化し過ぎないということです。グループ分けをしたり、対立構造を図式化したりする場合にも、その周囲にあるさまざまな形の、多方向に延びるつながりを意識したいと考えていました。人と人のつながりは、瞬間によってあらわれたり、消えたりもします。すべてを描くことは不可能

でも、そうしたつながりの可能性について、想像の余地を残したいと思っていました。

——「イスラームからつなぐ」シリーズを通じて伝えたいことは何でしょうか。

後藤：「イスラームからつなぐ」は全8巻で、第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』はその名の通り、「いざない」です。これを読んで「イスラーム信頼学」の全体像を把握した皆さんには、ぜひ、目の前にある7つの扉を順番に開けていただきたいと思います。第2巻『貨幣・所有・市場のモビリティ』、第3巻『翻訳される信頼』、第4巻『移民・難民のコネクティビティ』は2023年度中に、第5巻『権力とネットワーク』、第6巻『思想と戦略』、第7巻『紛争地域における信頼のゆくえ』、第8巻『デジタル人文学が映し出す名士たち』は、2024年度中に刊行予定です。さまざまな事象を人と人とのつながりの連鎖として見ることで、歴史や今の世界がこれまでとは違ったかたちで浮かび上がってくる。そんな体験を楽しんでもらえたらと思います。

巻頭特集 1 「イスラームからつなぐ」シリーズ刊行によせて

トークイベント「つながりと信頼から世界を見つめなおす」報告記



2023年7月27日、紀伊國屋書店トークイベント

「つながりと信頼から世界を見つめなおす

～「イスラームからつなぐ」シリーズを読む～」が開催されました。

「イスラーム信頼学」プロジェクトを広く紹介する新たな試みとなりました。

守田まどか

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2023年3月、イスラーム信頼学プロジェクトの成果公開の一環として企画されたシリーズ「イスラームからつなぐ」全8巻

のうち、第1巻『イスラーム信頼学へのいざない』が刊行された。今日、世界人口に占めるイスラーム教徒の割合はおおよそ4分の1と言われ、イスラームの影響力は今後ますます強まっていくことが予想される。「イスラームからつなぐ」シリー

ズは、歴史、経済、政治、ジェンダー、紛争解決、文化など多岐にわたるテーマを掘り下げながら、イスラームと「つながり」から世界をとらえなおし、現代世界や未来に向けた展望を提示することを目指している。

2020年度から5年計画で始動した「イスラーム信頼学」プロジェクトは、文部科学省科学研究費助成事業のなかで最も大規模な「学術変革領域研究」に分類される共同研究であり、7つの班から構成される。順次刊行が予定されているシリーズ第2巻から第8巻は、7つの班がそれぞれ割り当てられ、各班のメンバーによる専門的な論集となる。その導入して位置づけられる第1巻は、高校生から一般の読者まで、イスラームの歴史や文化に馴染みのない幅広い読者層を対象にしたものである。あわせて10章と5つのエッセイ、およびブックリストから構成され、各班の代表者が執筆者の中核を占める。「イスラーム信頼学」の意図や射程を、各分野の専門家が身近な経験を通して紹介している。

トークイベントでは、第1巻の共編者で執筆者でもある後藤絵美氏が司会を務めた。はじめに「イスラーム信頼学」代表の黒木英充氏がシリーズ企画の経緯と、「イスラーム」「コネクティビティ(つながりづくり)」「信頼」といった、同プロジェクトのキー概念を取り上げた。イスラームは7世紀頃のアラビア半島にはじまり、多様な地域へ広がっていくなかで絶えず「他者」である異教徒と交流しながら信頼を築いてきた。信頼(トラスト)とは、人間が他者とかかわっていく際の主体的な営みであり、不信にもつながりかねないリスクを伴う。事実、現代世界において異文明・異文化間の信頼構築はますます困難になっているように



右から黒木英充氏、野田仁氏、熊倉和歌子氏、後藤絵美氏、紀伊國屋書店・後藤崇氏

見える。「イスラーム信頼学」は、イスラーム文明が他者との交流の長い歴史のなかでつちかってきた暗黙知を言語化することで、それを戦略知へ変換していく試みであることが説明された。

続いて、第1巻の執筆者でシリーズ編者の野田仁氏と熊倉和歌子氏が登壇し、編者を担当するそれぞれの巻の予告を兼ねたトークが行われた。

野田氏は近現代の中央アジアを専門とし、「イスラーム信頼学」では翻訳という営みに着目しながらイスラームとコネクティビティについて研究している。7世紀頃のアラビア半島で預言者ムハンマドに下った神の言葉とされる啓典クルアーンは、アラビア語で書かれている。しかしその後、イスラームが世界各地に広がる過程で、アラビア語を母語としない人々を取り込んでいった。その際に重要な役割を果たしたのが翻訳である。翻訳を通してイスラームの価値体系が共有される

だけでなく、意図的に意味内容に曖昧さを残したり微調整をほどこしたりすることで、異なる価値体系の間で起こりうる対立を回避することもあった。こうした点において、翻訳という営みがイスラームの拡大と多様性に寄与したことが強調された。

熊倉氏は中世から近世のエジプトを専門とし、文書史料や古地図の解析とフィールドワークを組み合わせて、土地制度や水利システムを研究してきた。「灌漑遺構探し」が趣味という熊倉氏が「信頼」や「つながり」について研究するきっかけとなった出来事として、同氏の単著『中世エジプトの土地制度とナイル灌漑』のあとがき、とりわけ謝辞にまつわるエピソードが紹介された。謝辞を書くという行為、謝辞の裏にある人と人とのつながりの実態、あるいは謝辞によってつながろうとする戦略など、謝辞を通して浮かび上がってくる人間関係—すなわち「謝辞ネットワーク」—を研究することの面白さと可能性が語られた。

今日、世界の人口動態や政治情勢のなかでイスラームの存在感が強まっているにもかかわらず、日本においてはイスラームに対する理解は必ずしも深まっているとは言えない。シリーズ刊行がはじまり、それを記念したこのトークイベントは、イスラームを知ることの重要性を広く日本社会に共有し、歴史的に多様な形で展開してきたイスラーム文明に興味を喚起していくための重要なステップとして位置づけられる。



会場の様子

一般公開シンポジウム 『いま、地域から「豊かな食」と「つながり」を考える』



2023年11月18日に、一般公開シンポジウム

『いま、地域から「豊かな食」と「つながり」を考える』が開催されました。5名の研究者による基調講演・報告を基に、食が作り出す人々の「つながり」について、活発な議論が展開されました。

シンポジウムの開催概要

今日の日本では食をめぐる格差が広がりつつあり、また世界に目を向けて見れば、戦争や飢餓が止むことはなく、東アジアでの有事が日本に食の危機をもたら

す可能性すら否めない。現在、世界規模で「豊かな食」とは何かを再考することが求められる状況にあると言えよう。食はまた一方で、さまざまな次元の「つながり」を前提とする。食糧・原材料の

生産・流通はもちろん、調理を経て食事の場に至るまで、人と人の関係が前提となり、それを考えるには、あらゆる分野の学が関係し、連携することが求められるのである。

「イスラーム信頼学」ではこのような問題意識のもと、2023年11月18日に東京外国語大学AA研にて、地域研究コンソーシアムとの共催で一般公開シンポジウム『いま、地域から「豊かな食」と「つながり」を考える』を対面形式で開催した。このシンポジウムは世界中の食文化の多様性を楽しみながら、食を通じた人々の「つながり」と豊かさを再評価する場を提供することを目指したものであり、「イスラーム信頼学」内外の研究者のみならず一般の方も含め、のべ70人以上の参加がみられた。



全体集会『いま、地域から「豊かな食」と「つながり」を考える』ポスター

会場の様子

会場の外では参加型企画
「食でつながる 食が
つなげる」も開催された

全体討論の一場面



シンポジウムの詳細

最初に山根聡氏（大阪大学）が、「南アジア・ムスリムの食がつながり、育むもの」という題で基調講演を行なった。19世紀以降の南アジア地域を事例として、食文化がイスラーム教徒とヒンドゥー教徒の宗教アイデンティティ形成を促す歴史的展開が示された。そして、「共食」という行為がイスラーム教徒の連帯を育み、また他宗教とつながる場をも生み出してきた一方で、食文化をめぐるイスラーム教徒の連帯が、他宗教の食文化への排他性にもつながった場面も見られることが指摘された。

この基調講演に続いて、馬場多聞氏（立命館大学）が「海を渡る食材：中世のイエメンとインド洋西海域」という題で第1報告を行なった。この報告では、13世紀から15世紀のインド洋西海域を舞台に、モンスーンを利用して羊やギーをはじめとする様々な食材が海を渡り、イエメンのラスール朝宮廷にまで供給される道筋が明らかにされた。また、そのような海洋交易を通じた食材の流通と嗜好の共有という現象が、インド洋西海域において古代から現代に至るまで通時的に存続している可能性が示唆された。

続く第2報告は、砂井紫里氏（千葉工業大学）による「ともに食べる：福建南部の『僕ら』の清真寺（モスク）における共食」であった。イスラーム教徒が少数派の福建省泉州市郊外の清真寺周

辺をフィールドとした調査から、そこで頻繁に行われる「共食」について、その開催時期や場所、調理者や参加者などが詳らかにされた。そして、「共食」が宗教、宗族、民族、地域など様々なレベルの集団の内部での関係性を再確認させるだけでなく、集団間の「つながり」をも形成する場としても機能していることが示された。

続いて、工藤正子氏（桜美林大学）による第3報告「移民家族における食とジェンダー：つながりとアイデンティティに着目して」が行われた。日本とイギリスにおけるパキスタン系移住者（移民）の家族を対象としたインタビュー調査を基に、まず食に見られる性別役割分業の変容が示された。また、食による宗教アイデンティティの継承とそこから形成される帰属意識の複数性、そしてそれらもたらす移住先社会との「つながり」と分断の両側面が、多くの具体的な語りの事例を通じて指摘された。

最後に、井堂有子氏（東京外国語大学AA研）が「戦争と食糧：つながりと依存、自律性をめぐって」という題目で第4報告を行なった。昨今のウクライナおよびガザにおける戦乱という喫緊の課題を念頭に、平時と有事における食の連続性から説き起こしつつ、両地における食糧の武器化と、国際社会の食糧危機対応にみられる二重基準の問題点が示された。そして、食の相互依存とその

武器化が進む現代において、「誰かの犠牲の上に立つ食の豊かさ」の限界が顕在化していることが論じられた。

以上の講演・報告から提示された食にまつわる多様な論点について、コメンテーターの大澤由美氏（青山学院大学）は、「（つなげる）食と何か」と「何がつながるのか・つながらないのか」という2つの観点から整理をした上で、食と「つながり」の検討から得られる視座として、「包摂と排除」と「食料主権と豊かさ」の2点を挙げた。また、同じくコメンテーターの南直人氏（立命館大学）は、これらの講演・報告が対象とする時間・空間・手法・内容が多岐にわたる中で、一貫して宗教が重要な意味を持つことを指摘し、食を研究する上での宗教の重要性を改めて提示した。最後に、フロアを交えた全体討論においては、「ハラル食がもたらさうる疎外や分断をどう克服できるか」という、ここまでの議論からさらに一歩踏み込んだ質問や、「昨今では共食を否定ないし敬遠する潮流が勢いを見せているのではないか」という、新たな視角を持ち込む質問などが寄せられ、登壇者との間でさらに盛んな議論が展開された。

文責：藻谷悠介

イスラーム信頼学 エッセー



ネジブ・パシャ図書館（2019年、トルコ・ティレ、
荒井悠太撮影）

人間社会において誰しものが信頼関係を形づくるために寄るべとしうる普遍的な価値を共有することは可能なのか。

沖「ガザ紛争と国際法への信頼」は、2023年10月のガザ紛争発生によって国際法への信頼に揺らぎが見える今日の状況を念頭に、改めて国際法の意義を問う。同紛争において国際法に反するような行為が度々見られる。また、国際法が紛争の停止に向けて十分な効力を発揮できていない。それゆえ、国際法は何の役に立つのかという批判的な問いもしばしば耳にする。だが、こうした問いは国際法の有用性に対する期待や希望の裏返しなのではないか。国際法への信頼が揺らいでいる状況だからこ

そ、信頼関係を構築するための基盤になりうる広く共有される価値体系としての国際法の役割について再考が求められるのである。

岩崎「ラフン契約で家を借りれば」は、現代イランの不動産賃貸市場で実践されている「ラフン契約」という慣行について考察する。「ラフン契約」とは、住居の賃貸契約の一形態であり、賃借人が入居時に物件の所有権価格に対して一定の額を賃貸人に支払い、契約期間の終了後に全額の返金を受けるというものである。筆者は、「ラフン契約」をめぐる自身の経験からこの慣行にまつわる信頼について読み解くと共に、同慣行を庶民たちが生活のために編み出したものとして位置付ける。その上で、韓国にも類似する慣行が見られることを指摘して、文化を超えて遍在するアイデアの存在を提示する。

2つのエッセーは、「イスラーム信頼学」プロジェクトが課題とする、イスラーム文明の関係づくりにまつわる「暗黙知」を「戦略知」へと昇華するという作業を進める上で極めて示唆に富むものである。

嘉藤慎作

ガザ紛争と国際法への信頼

沖 祐太郎
九州大学

2023年10月に発生したガザ紛争によって、国際法を専門にする私は研究の意義を内省することを迫られた。この紛争にとって国際法にはどのような意味があるのか。損なわれてしまったようにも思われる国際法に対する信頼を回復するために何ができるのか。

2023年10月、私が専門としている「国際法」に対する信頼が、またしても大きく揺らぐ事態が発生している。10月7日、パレスチナのガザ地区を実効支配するハマスなどによるイスラエルに対する攻撃が行われた。これに対しイスラエルは、すぐに反撃としてガザ地区に対する空爆、封鎖を行い、さらに地上からの侵攻も開始。両者、特にガザにおいて甚大な被害が生じてしまっている。このエッセーを書いている10月末の時点では収束の目処もたっていない。この文章が公開される頃には、せめて事態の沈静化が見られていて欲しいと願うばかりだ。

かりだ。

私はちょうどこの10月の間、エジプト、ヨルダン、オマーン、UAE、カタールと1ヶ月程度の出張中であつた。こちらのテレビ放送はどのチャンネルもガザの現在の様子をライブ中継し続けていた。中継の合間には、国際政治や国際法の専門家のコメントが挟まれる。そうしたコメントを全てチェックしたわけではないが、テレビから目を離していてもアラビア語で「カーヌーン・ドゥワリー（国際法）」、「カーヌーン・ドゥワリー・インサーニー（国際人道法）」などと言った言葉が耳に入ってきた。主に、イスラエルの行為を国際法に基づいて非難する議論である。

他のチャンネルに切り替えると、あるいはSNSなどで検索すると、イスラエルの行為を「自衛権」の行使として正当化する議論もたくさん見られた。こうした論調に対しては、「そもそも私人であるハマスの行為に対する反撃を国家間関係における自衛権で正当化できるのか」とか、「占領地に対する自衛権の行使などあり得るのか」であるとか、「自衛権の行使としては反撃の程度が均衡性を失っている」といった議論が続いており、



写真1：マスカット市内で売られていたガザ支援のためのバッチ（筆者撮影）



写真2：外交官による自伝の例（筆者撮影）



写真3：エジプト国際法学会（筆者撮影）

国際法学的にしっかり検討したわけではないし、詳細は省くけれども、とても妥当な議論なようには思われた。

出張先の国々の町に出て見ると、基本的にはどこも平常通り、平穩そのものであった。それでも折々、今回の紛争に対する人々の反応に触れることがあった。例えば、レストランでテイクアウトを頼んだり、スーパーで買い物をしたりと、テイクアウトの袋に「Free Gaza」と書かれた付箋が貼られていたり、レストランや公共交通機関の中でパレスチナ支援のためのバッジやバナーを売っている人達を多く見かけた(写真1)。

さらに、いくつかの国では、今回の事態を受けて「パレスチナ支持」、「即時停戦」、「ガザの解放」を求めるデモが行われていた。ロシアが提案した停戦を求める安保理決議案が否決された際には、この決議に反対したアメリカ、さらには日本などの大使館の周りでデモが行われることもあった。また、現地の人達と話していると、「この決議案に日本が反対したことはとても残念だった。君はどう思うのか？」などと問いかけることも、一度や二度ではなかった。

こうした問いかけをされた際、私の専門が国際法であることを話すと、続く会話ではどうにも居た堪れない気持ちになる。大体の場合、大雑把にいうと「国際法なんて何の役に立っているの？」という問いかけが返ってくるからである。この気持ちはよく分かる。特にパレスチナ問題の解決に、これまで国際法がどれほどの役割を果たしてきたのかと街中で正面から何度も問われると、正直なところ言葉が出てこない。

国際法とはそれぞれに主権を有する国家間の法である。大雑把に言い換えると、個々の国家が条約などの形式で合意することによって作りあげ、自らの意思で実現していくしかない法である。国内法のように、その実現を警察などの法執行機

関が担保してくれたり、法の解釈が分かれた際には最高裁判所がその解釈を統一したり、あるいは社会にとって必要な法が欠けている時に国会が新たな法を迅速に制定したり、そういったことができないのが国際法である。それでも、国際法学の有力な学説によれば、「ほとんどの国際法はほとんどの場合に遵守されている」。国際法の規律する範囲は、例えば投資、環境保護、海洋境界確定、人権保障など極めて広いし、国家が自ら作っているといえるのだから、ほとんどの場合に守られるのは当然でもある。遵守することが利益になるから、そうした法を作ったのだ。しかし、それでも違反は、特に今回のような大規模な違反は、とても目立つ。上述のように「国際法なんて」という憤りの混じった疑問を持つ人に、「いや、国際法はほとんどの場合は守られているのですよ」と答えたところで、こういう答えが聞きたいわけではないだろう。

「国際法は何の役に立つのか」といった疑問は、中東・イスラーム世界において広く、そして長く存在しているように思われる。例えば、2000年代初頭にエジプトの某大学で行われた国際法についての一般向け講座をまとめた書籍においてすら、その冒頭にこうした疑問が示されていた。

こうした逡巡を抱えつつ、中東・イスラーム世界における国際法を研究するにあたって私が選択しているテーマは、この地域の人々による国際法の受容過程を歴史的に明らかにしようというものである。上の深刻な疑問に答えるという観点からは、必ずしも合理的な選択ではなかったかもしれない。

ただ、アラビア語圏に注目すると、国際法に関連する書籍や新聞、雑誌の記事は19世紀から出版されているし、20世紀後半にはエジプトに国際法学会も設立されている(写真3)。新型コロナの流行前には、夏休みの期間中、他のアラブ諸国から国際法学会に、あるいはカイロ市内の法学系書店に国際法関連のアラビア語書籍を収集しに学生達が訪れていた。また、最近では戦後の国際関係に関わった外交官による自伝が多数出版されており、そういった書籍の中では彼らがどのように国際法を意識して勤務してきたかが記されている(写真2)。こうした活動の背景には、彼らの国際法に対する何らかの期待が込められている。

「国際法なんて何の役に立っているのか」という問いかけは、国際法は本来、役に立つべきだという希望の裏返しなのかもしれない。こうした希望がなくなってしまう前に、国際法に対する信頼を取り戻すために何ができるのか、心に留めながら研究を進めなければと思っている。

ラフン契約で家を借りれば

岩崎葉子

アジア経済研究所

数多あるモノのなかでも比較的長いスパンで使用される土地や建物といった不動産には、その取引にまつわるさまざまな慣行ができあがる。

ここに紹介するのもそのひとつで、現代イランの不動産賃貸市場でさかんに交わされている「ラフン (rahn)」と呼ばれる契約である。

ラフン契約の中にはいくつかヴァリエーションがある。テヘランの不動産屋の店先には、「ラフネ・カーメル(満額のラフン)」とか「ラフノ・エジャーレ(賃貸料付きのラフン)」などと銘打った広告が並んでいる。いずれも住宅(マンション、アパート、一戸建てなど)の賃貸に用いられる契約形態だ(詳細は拙稿2016「イラン不動産市場における「ラフン」諸契約の社会経済的機能—債務担保か賃貸借か」『アジア経済』57/3: 2-24を参照されたい)。

基本形のラフン(つまりラフネ・カーメル)契約では、その物件の所有権価格のおおよそ20~25%相当額(ラフン金)を、賃借人が入居時に一括して賃貸人に支払う。賃貸人と賃借人とは1年ないし2年の賃貸契約を結ぶのだが、その間、賃借人の月額賃貸料の支払い義務はいっさい発生しない。契約期間が終了し賃借人が退去する時が来ると、賃貸人は賃借人が最初に支払ったラフン金をすべて賃借人に返金し、これによって二人の契約関係は終了する。

要するに、ラフン金というのは賃貸人による賃借人からの

「借り入れ」で、契約終了時に賃貸人がこれを無利子で返済するのである。借入金の利子分が月額賃貸料と相殺されるため、賃借人はその物件に1年ないし2年の契約期間中「無償」で居住できる。

これに加えてもう一つ、広く普及している契約形態がラフノ・エジャーレである。基本形のラフン契約とは違って、賃借人は入居時に賃貸人にラフン金として一定金額を一括払いするものの、その後も、毎月少額の月額賃貸料を支払う。いわばラフン金と月額賃貸料とを組み合わせた格好になっている。賃借人が、賃貸人が要求するラフンの全額を支払うことができない場合には、第二の形であるラフノ・エジャーレ契約にして、支払ったラフン金の額に応じて減額された金額を毎月支払うのである。

こうすれば、同じような条件の物件を普通に賃借した場合と比較して毎月の家賃が少額に抑えられるので、賃借人にとっても十分にメリットがある。ラフノ・エジャーレであっても、賃貸契約期間が終了すればラフン金として支払った額



テヘランでも少なくなってきた一軒家。周りはどんどん集合住宅に建て替わっている(筆者撮影)。



テヘラン市内の不動産屋。店の看板には「ラフン」「エジャーレ」「売買」とある(筆者撮影)。

がすべて返還される。すなわち、ラフン金部分が貸借人から貸貸人への無利子の融資になっているわけである。

ラフン契約の契約書の書面は一見すると通常の賃貸住宅の契約書と変わらないが、その余白にはこれがラフン契約であることを示すためにこんな文言が書き加えられる。「金〇〇〇リヤールが、ガルゾル・ハサネ(無利子貸付金)の名目で貸借人から貸貸人に支払われた」。

筆者がラフン契約について調査を行った2014年時点では、テヘランの賃貸住宅市場では、ラフノ・エジャーレの利用率が高く、インフォーマントの不動産業者の営業範囲内ではいずれも契約に至った賃貸住宅全体のおよそ8割がこの契約を結んでいるとのことだった。

ところで、筆者が2年間の長期調査のためにテヘランへ赴任した時、このラフン契約で窮地に立たされたことがある。子連れで赴任したため、子供の学校への徒歩圏内にどうしても家を借りたかった。さんざん探してようやく一軒の新築物件を見つけたが、所有者は「(日本円にして)数百万のラフネ・カメルでないと貸さない」と言ってきたのである(おそらく建築費用が足りなかったのだろう)。そんな大金は工面できないと途方に暮れていたら、この話を聞いた複数のイラン人の友人たちから同時に同じオファーを受けた。

「私とそのラフン金を出してやろう」「貴方は私と通常の賃貸契約を結んで月額家賃を払えばよい」

おわかりだろうか。彼らは、所有者にラフン金を払って家を無償で借り、それを筆者に転貸することで相場どおり(あるいはそれより少し割高な)月額賃貸料をとり、筆者の帰国後は家を明け渡してラフン金も取り戻すという、ちょっと「おいしい」話をもちかけたのだ。もとの所有者に、居住するのは外国人のイワサキさんという人です、と一筆いれておけば法的にはなんの問題もない。筆者も月極の賃貸契約を結べるから三方良しなのである。

複数のイラン人からまったく同じオファーを受けたということは、ラフン契約がきわめてポピュラーであって、普段から市民はつねにこんな財テクを考えているため誰でも思いつくアイデアなのだという事実を示している。

しかしもちろん数百万円は大金であるから、相手が誰であっても同じオファーがなされるわけではない。彼らが、所有者との交渉や契約不履行のリスクを引き受けてくれるのは、旧知の友人である筆者が毎年イランへ仕事でやってくることや、日本の勤め先から給料をもらっていることをよく承知し



「工事中はご迷惑をおかけします」の垂れ幕とともに建築中の集合住宅。元は大きな一軒家だった(筆者撮影)。

ているからである。あくまでも人助けが主眼ではありつつも、彼らからすれば筆者はそこそこ手堅い投資先でもあったのだ。イランの友人に金を無心するような事態に陥ったことが(たまたま)一度もないというあたりも、ありがたい「信頼」を勝ち得るポイントであったかも知れない。

ちなみにイランの民法上、厳密な意味でのラフンは賃貸借とは関係なく、動産や不動産を債務の担保とする金融取引として位置づけられる。万一ラフン金の返還がなされなかった場合にはここが大きな問題になり得るのだが、あまねく普及したラフン契約は、本来の語義を超えて、あくまでも賃貸借契約として処理されている。高い家賃を支払いながら住居を確保し、日々の生活をやり繰りする庶民が編み出した不動産取引慣行といえる。

ところでじつは、ラフン契約とまったく同じ経済実践が韓国にもあり、「傳賃^{チョンセン}」という名で知られている。慣行が形成された経緯は異なるものの「貸与した金銭の利子の代替として不動産の用益そのものを得ることのできる権利」という普遍的なアイデアが両者の間には通底している。人間の考え出す仕組みというのは、文化を超えてじつに似通っているということである。

インタビューが「うまくいく」とき

飛内悠子

盛岡大学

インタビューがうまくいくときとはどのようなときだろうか。

聞き手と語り手との間に信頼関係があるときではないだろうか。

どのように、そしてどのような信頼関係を作るのか？英国で調査しつつ、考えてみた。

私は現在（2023年10月）、在外研究のため英国、エディンバラに滞在している。調査テーマは英国のキリスト教福音派、あるいは信仰覚醒の実態についてであり、教会の活動に参加しつつ、教会関係者へのインタビューを行っている。

インタビューの申し込みに応えてもらい、対象者に会いに行くときにはい

つも少しの緊張感がある。そしてインタビューをしているとき、新たにわかる事実を自分の持つ知識とすり合わせること、新たな問いが浮かぶ。その問いを「どのように聞くか」、「どこまで踏み込めるのか」と考えながら相手に投げかける。インタビューはいつもスリリングである。相手が私自身の予想を超えて話をしてくれることもある。

ごくシンプルな答えしか得られなかったこともある。

もちろん私は調査者としてインタビューを行う前に、うまくいくように最大限の努力をする。どのような努力か。突然教会に現れて、いろいろ聞きまわるのは単なる不審者である。最初はひとまず礼拝に参加する。礼拝の後、大体お茶やコーヒーとともに交流する



ウガンダ、難民居住地に建てられた教会（2017年）

調査拠点の一つである
エディンバラの教会
(2023年)

時間が設けられているのでそこで話を
する。教会はおおよその場合初めて来
た訪問者に優しい。それに便乗しつつ、
調査に来た旨を話し、教会について聞
いてみる。警戒されるかと思いきやあ
まりされない。日本から来た英語がへ
たくそな研究者を警戒する理由はない
のかもしれない。少しずつ教会の活動
に参加し、知り合いを作り、「ああ、あ
の…」と認識してもらえるようになるこ
とを目指す。つまり、調査対象者に自
分のことを知ってもらう。頃合いを見
計らい、教会に調査許可を求める。許
可が得られたのち、インタビューの申
し込みをする。インタビューの申し込
みをする頃には調査を始めてから数か
月がたっている。

ただしそれができない場合、あるい
はこの過程を飛ばしてしまえる場合が
ある。できない場合とは、事前に教会
や調査地に通えない場合である。する
とぶっつけ本番で調査許可の申し込み
になり、相手は警戒心満載である。こ
ちらは懸命に調査の理由と目的を説明
して、警戒を解こうと試みる。だいた
い、調査に来た理由に納得してもらえ
ると警戒が解ける。もちろん説明が悪
く、納得してもらえないとインタビュー
はカラ回る。共通の知り合いがいたり
すると話が格段に速く進む。もう一つ
の飛ばしてしまえる場合とは、最初か
ら何らかの知り合いであると認識され
る場合である。私はもともと南スーダ
ンとウガンダの国境地帯出身民族の移
住先を巡って調査をしていた。初めて
訪れる教会であっても、民族語が使え、
彼らの故地の話ができる判断される



と調査は格段に進む。知ってもらう過
程のいくつかを飛ばせるためだ。

何をもってインタビューが成功した
といえるかは時と場合によって異なる
が、インタビューが「うまくいく」と
き、そこには私自身と相手との間に信
頼関係が生まれているのではないだろ
うか。相手に私のことを知ってもらい、
その結果この聞き手に自身の話を預け
ていいと判断された、つまり賭けても
らったときに、インタビューは「うまく
いく」。よく考えなくても、自身の人生
に突然現れた研究者は「変な奴」である。
この「変な奴」に自分の情報を渡してい
いのか。変な風に使われないか。当然

疑心暗鬼になるだろう。信頼とは一種
の賭けであるという。聞き手と語り手
の間には、まさにこの意味でのつな
がり—信頼関係が必要とされる。

英国に来て半年が過ぎ、そろそろ調
査も終盤に差し掛かっている(12月か
らはウガンダで調査するため)。毎度の
ことながら調査終盤に詰め込まれる予
定をこなしつつ、果たして調査対象者
との信頼関係は築けただろうかと自問
する日々である。



長野壮一 慶應義塾大学経済学部・研究員

“ デジタルヒストリーにおけるテキストデータ作成の技術は、初学者にとって容易に馴染めるものでは必ずしもない。本書は、そうしたデジタルテキストの分析に関心を持つ研究者のための易しい手引きである。 ”

デジタルヒストリーを實踐する

データとしてのテキストを扱うためのビギナーズガイド



ジョナサン・ブレイニー、ジェーン・ウィンターズ、サラ・ミリガン、マーティ・スティア (大沼太兵衛、菊池信彦訳) 『デジタルヒストリーを實踐するーデータとしてのテキストを扱うためのビギナーズガイド』文学通信、2023年。

本書を通読して評者が想起したのは、情報科学を専攻する知人が2010年頃、折に触れて口にしていた言葉だ。曰く、「プログラミングは無職を目指さなければいけない」。プログラミングは一部の専門家が占有する特権的な技術ではなく、あたかも「おばあちゃんが縫い物をするように」誰もが日常的に行う普遍的な営みを目指すのだという。

昨今の国内外におけるデジタル人文学の流行は、この理念を体現するかのような様相を呈している。歴史学や文学の研究者の間で R や Python がかくも普及する状況を当時誰が想像しただろうか。「明日の歴史家はプログラマとなろう」という歴史家ル・ロワ・ラデュリによる半世紀前の発言が再び注目を集めている所以である。

本書は、そうした現状を踏まえて2021年、デジタルヒストリーを牽引する拠点の一つであるロンドン大学歴史学研究所(IHR)によって編まれた。本書が定義する「デジタルヒストリー」の範囲は、通常この語から想起されるものに比べて広範に及んでいる。すなわち、たとえプログラミングを用いなくとも、研究の過程で何かしらデジタルツールを用いたプロジェクトであるならば、それはデジタルヒストリーと見なされる。本書の主眼は、副題にある通り、テキストをデジタルデータとして扱うための初歩的な手法を解説することにあり、その際、簡単な無料のツールで何ができるかを示すことを狙いとしている。

歴史学の主な分析対象がテキストであることは言を俟たな

い。それはデジタルヒストリーにおいても同様である。本書において「テキストデータ」とは、アナログ史料を電子化し、さらにコード化・構造化したものが想定されている。ここでテキストデータ作成の具体的な事例として検討されるのは、1879年ロンドンの郵便住所録であり、これを題材に、電子テキスト作成に際するデータクリーニングの手順が説明される(第2、3章)。

続いて、データ解析のための手段として、本書では主として正規表現が解説される。正規表現はコマンド入力によりテキストデータ内における特定の個所の検索や置換といった操作を行う技術であり、これを用いることで、大規模なデータセットの中にパターンを見出すことができる。本書では、単なるプレーンテキストの処理に加えて、XML によるマークアップが施された構造化テキストの処理における利点について説明が行われる(第4、5章)。

こうしたテキストデータの取り扱いに際しては人為的過誤がつきものであり、また作業過程を明示する必要も相まって、定期的なバックアップの取得が欠かせない。本書では、Gitを用いたバージョン管理の実態が解説される(第6章)。さらに、データクリーニングの一貫としての研究成果の可視化にも目配りがされている(第7章)。

なお、本書の想定読者は学部学生をはじめとする初学者であり、それゆえ、今日広く普及した感のあるマークアップの国際規格である TEI も、本書では簡単に触れられるだけにとどまっている。もしも本書の内容では物足りないという読者は、日本語版オリジナルの充実した訳註および補論を参照すればよい。この箇所で示される通り、本書の技術は欧語以外にも適用可能であり、自身の研究する時代や地域を問わず手引書として活用することが可能である。

ところで、これらの情報学的な手法は従来、その科学性・客観性が半ば戦略的に強調されてきた。しかしながら、本書中の例えば、「他者の人生を研究する際には、どのような努力を払って理解しようとするにせよ、共感と同情が必要条件であることは間違いありません」(175頁)あるいは「データは偶然の産物であり、部分的なものにすぎず、きれいで洗練された発表済みの可視化が示すような扱いやすいものではない」(177頁)といった記述を目の当たりにするならば、テキストデータは無味乾燥な情報に過ぎないとするステレオタイプは修正されよう。昨今の風潮に違和感や抵抗感を持つ読者にも本書が推奨される所以である。

本書で示されるように、伝統的な人文学における精読が職人芸であったのと同様、「遠読」とも称されるデジタル技術を用いた読解もまた職人的な技法^{メタクニ}を要請する。思えば、縫い物という行為は一見自然な営みに思われて、実の所は高度な技術が求められる実践である。ボタン付けでさえ心許ない評者のような不器用な読み手であっても、本書を糸口とすることで、テキストデータを取り扱うための基本的な素養を習得することができるだろう。

〇〇に 埋め込まれた信頼

今回は、歴史学研究の立場から信頼形成のための実践や形成された信頼が垣間見える事例を紹介する2本の記事をお届けする。

五十嵐は主従間あるいは同僚間で形成された信頼を看取できる事例としてマムルーク朝のワクフ（寄進）文書を取り上げる。ワクフの管財人を委ねるといことは、寄進者がその人物に対して問題なくワクフの運営を継続してくれるであろうという信頼を寄せていることを表す。一般には、子孫の中で最も適格な人物、あるいは法の番人である法官に管財人職が委ねられることが多かった。だが、マムルーク朝においては、寄進者のマムルークのうちの適格者が、寄進者の子孫と協力して管財人職を務めるように規定されていたという。また、マムルークの側でも自身の子孫に優先して主人や同じ主人に仕えるマムルークの同僚を管財人として設定するという事例が見られた。こうした例は、世襲を基本とせず、軍事奴隷制に基盤をおいたマムルーク朝の特質を信頼の観点から

明示するものであろう。

一方、中西は、中国ムスリム（漢語を話すムスリム）が非ムスリムの中国人から受容され、信頼を得るために、イスラームの諸概念を漢語に翻訳する際にとった戦略を分析する。中国ムスリムは、もともとのアラビア語やペルシア語での術語を発音の近い漢語で写して用いた。その際、音写するのみでなく、漢語本来の意味を活かす形で訳することで非ムスリムの中国人からより好ましい形で理解されることを目指したのである。その一例として、信徒を意味するアラビア語「ムウミン」を表す語として用いられた「穆民」が挙げられる。ただし、この語は後代になって意図しない形で理解され、中国ムスリムはその誤解をとくために改めて努力をすることとなるのであった。

信頼やそれを形成しようとする営為、コネクティビティを測ることはなかなか難しい作業であるが、2本の記事はそうした問題に取り組むうえで、有用な視点を提供してくれるものである。

嘉藤慎作



カラーウーンの寄進施設（2023年、エジプト・カイロ、出川英里撮影）

寄進文書に埋め込まれた信頼

五十嵐大介

早稲田大学

マムルークたちの間を結びつけた主従関係や同僚関係は、信頼とともに成り立っていた。その信頼関係は、寄進文書の中にうかがい知ることができる。

マムルーク朝時代(1250-1517年)のエジプト・シリアでは、王朝の軍人支配階級であったトルコ系やチェルケス系のマムルーク(軍事奴隷)の手によって、多数のワクフ(寄進)が生み出された。宗教・教育活動や水利施設の維持、貧者に対する食糧配給といった公共事業がワクフを通じて実施され、都市の商業施設や農地の多くがワクフの財源として寄進された。ワクフは、宗教的善行として奨励され、それを実施することで、神から報酬が得られ、最後の審判の際に天国へ行く可能性を

キジュマースがワクフで設立した学院(筆者撮影)



高めると信じられた。また、ワクフ制度を通じて、自らの名前を冠する宗教施設を建設し運営することは、自身の敬虔さや威信を人々にアピールすることにもつながった。それに加えて、自身の子どもや子孫、その他の家族成員をワクフの受益者とすることもできた。いうなればワクフは、富者が来世での救済と現世での実利という二つの望みを、自身の死後も追及することができる仕組みであった。

ワクフの管理運営の責任者が、ナーズィルあるいはムタワッリーと呼ばれる、管財人であった。管財人は、寄進者がワクフ設定時に定めた規定に基づいて選任された。通常、寄進者は存命中、自ら管財人をつとめたが、死後、管財人職を誰に任せるかは、重要な決断であった。ワクフの健全な維持運営は管財人の手腕と人格にかかっていた。寄進財の資産価値を落とさないよう定期的にメンテナンスを行い、その借り手からきちんと賃料を徴収しなければ、規定通りの運営は難しくなる。さらに、その寄進財の資産価値が高ければ、有力者が権力を盾にそれを手に入れようとするこもあったから、手立てを尽くして寄進財の流出を防がなければならない。他方で、管財人が私益を優先し、ワクフの収入を懐に入れ、私腹を肥やすこともめずらしくなかった。寄進財を手に入れたいと望む有力者と示し合わせ、それを引き渡す代わりに金銭的な見返りを求めることも見られたのである。

ゆえに、自身の死後誰がワクフの管財人となるかを定めた規定には、「この人物ならば私の死後もワクフをつつがなく運営してくれるだろう」という、寄進者の信頼が反映されている。前近代の各地のムスリム社会では一般的に、寄進者の子どもの一人——しばしば「最も適格な人物」と表現される——が管財人を務めるとする規定をもつワクフが多かった。ワクフの多くが寄進者の子どもと子孫を受益者に含み、一種の「家産」として継承されたことを考えれば、一族の「家長」となるような人物が管財人となるのは望ましいことであった。

カーニーバーイ・
カラーの学院 (太田
絵里奈氏提供)



また、「イスラーム法の番人」たるカーディー (法官) に管財人職を委ねる場合も多かった。

しかし、マムルークたちのワクフでは、子どもや子孫のみに管財人職を任せることはほとんどない。多くの場合、寄進者の解放奴隷の最適格者が寄進者の子どもの一人と協力して管財人職を務めるよう規定された。マムルークたちは、奴隷として購入され、教育と軍事訓練を受けたのちに奴隷身分から解放され、主人の私兵として仕える、解放奴隷であった。そして軍事支配集団の一員となった彼らは、自身もまた奴隷を購入し、教育と軍事訓練を施し、奴隷身分から解放し、自身のマムルークを養成した。こうした軍事奴隷制を通じて、マムルーク朝の支配層は再生産されたのである。あるマムルークにとって、自身が養成したマムルークは、自らの軍事力の柱であるのみならず、政治軍事上の職務を遂行したり、家政を取り回すうえで欠かせない、最も頼りになる存在であった。他方、マムルークの子どもや子孫はアウラード・アンナースと呼ばれ、王朝の支配層のヒエラルヒーの中ではマムルークたちよりも劣位に置かれていた。親のもつ地位や官職は彼らに継承されることはなかった。マムルークの寄進者にとっては、子どもだけに管財人を任せるのは心もとなく、経験豊富な自身のマムルークによるサポートが必須と考えたのである。それはマムルークたちの能力のみならず、自身の死後も彼らがワクフの運営に誠実に取り組んでくれるに違いないという、彼らとの絆に対する信頼に基づいていた。

一つ例を見てみよう。王朝末期の有力部将で、^{ランマーフ}「槍名人」の異名で知られるカーニーバーイ・カラーは、カイロに二つの学院を建設し、それらと自身の子ども・子孫を対象とした大規模なワクフを設定した。1514年8月24日付の彼の寄進文書

には、自身の死後、男系子孫のうちの最適格者と、解放奴隷の最適格者が協力してワクフの管財人職を務めるよう規定されている。そのうえで、彼は自身の解放奴隷——彼らがマムルークであることは全員がトルコ名であることからわかる——を3～4人で構成される7つのグループに分け、まず第1グループの3人の中から管財人となる人物を選び、その3人が全員死去するなどして就任が不可能となった場合に次の第2グループから選ぶというように、管財人を務める優先順位が細かく定められている。この優先順位には、彼のマムルークひとりひとりに対する信頼度の高低が表れているのである。

主人からマムルークへという上から下に対する信頼のみならず、マムルークから主人へという、下から上に対する信頼も、管財人規定に見ることができる。1460年、スルターン・イーナールの娘婿で官房長の要職にあったユーヌスのマムルーク、ヤシュバク・マフムディーは、自身の死後のワクフの管財人に、主人のユーヌスを自分の子どもよりも優先して指名している。また、同じ主人に仕えた同僚のマムルーク同士は、兄弟関係にも準えられる強い連帯意識を有していたが、そうした絆も管財人規定に表れる。1465年、キジュマースは、自身の死後のワクフの管財人として、のちのスルターンで当時有力な部将の一人であったカーイトバーイを、自身の子どもや解放奴隷に優先して指名している。キジュマースとカーイトバーイは、二人ともスルターン・ジャクマクのマムルークであり、かつアガ・イニー関係と呼ばれる親密な先輩後輩関係にあった。マムルーク同士を結びつけた、軍事奴隷制に基づく人間関係が、信頼とともに成り立っていたことを、寄進文書は示しているのである。

「ムーミン」に埋め込まれた信頼

中西竜也

京都大学

中国ムスリム（漢語を話すムスリム）は、イスラームの諸概念をどう漢語で表現するかについて知恵を絞ってきた。それは、非ムスリム中国人と信頼・共存関係を築いて自らの存続を確保することに関わると考えられたからである。

突然ですが漢語（中国語）のクイズです。「穆民」は何を意味するでしょうか。ヒントは、現代漢語で「ムーミン (mumin)」と発音します。もちろん答えは、トーベ・ヤンソンの物語に出てくる彼……ではないです（その彼は現代漢語で「姆明」等と表記するそうです）。正解は、イスラーム信徒のことです。「穆民」は、アラビア語で「信徒」を意味する、「ムウミン (murmin)」という言葉の発音を写したも

華寺拱北

甘肅省臨夏市にあるムスリム聖者、馬来遲（1766年没）の墓。ドーム屋根を中国の建築様式で表現している（筆者撮影）。



のなのです（ちなみにムーミントロールは、アラビア語だと「安全」を意味するアマーン (amān) の名で呼ばれているようです）。

このようなアラビア語あるいはペルシア語の術語を発音の近い漢語で写した言葉は、中国ムスリム（漢語を話すムスリム）がしばしば使ってきたものです。そうした音写語の中には、漢語の音声だけでなくその本来の意味をも利用したものがありました。

たとえば「拱北」。現代漢語の発音は「ゴンベイ (gongbei)」。これはペルシア語で「ドーム」を意味する「ゴンバド (gonbad)」を音写したものです。そして「拱北」とは、ドーム屋根で飾られた聖者墓のことを意味します。中国を含むイスラーム世界の各地で、聖者墓はムスリムたちに崇敬、参詣されてきました。参詣者たちは、メッカ巡礼の際にカアバ神殿の周囲を巡るが如く、しばしば聖者墓の周囲を巡回する儀礼を行います。

いっぽう漢語本来の「拱北」は、『論語』為政の「徳によって政治を行えば、北極星が中心で動かず、他の星々がこれを共るような状態になる（為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之）」を踏まえた言葉です。すなわち「拱北」は、人々が有徳の君主に自ずと敬意を抱き従う様を、星々が北極星の方に恭しく向ってそれを取り囲む（拱る）ことに譬えて言った表現です。中国ムスリムは、さらに転じて、ムスリムが崇敬、参詣する聖者墓を、星々の従う北極星に譬えて「拱北」と呼んだわけです。

実は「穆民」も、おそらく漢語本来の意味を生かした音写語だったと考えられます。そしてその音写の工夫に、中国ムスリムが非ムスリムとの間に信頼関係を築こうとした努力の跡を垣間見ることができます。

『魏書』巻48「高允伝」の次の一節に「穆民」の語が見えます。すなわち、天が愛顧と命令によって北魏王朝を「文明の中心たる中華」の正統な主として成立させた（眷命有魏）後、同朝は「武威を用いて騒乱を鎮め、準則を示して人々を穏やかにさせた（静亂以威、穆民以則）」との一節です。こ

の一節は、そのような正統で立派な統治に背いた「中国北方の野蛮な民(北虜)」を、北魏の皇帝顕祖が再征服したことを、彼の臣下、高允が称えた言葉の一部です。ここで言う「穆民」には、反抗的で野蛮な人々を規範に則って治めることで、従順で文明的な人々に変える、という含みがあるようです。

従ってイスラームの文脈での「穆民」は、漢語の音声のみならず意味の上からも「神の命令(シャリーア)に従うことで慎ましく真人間になった人々」といった意味で理解されていたかもしれません。中国ムスリムは、ムハンマド(Muhammad)をしばしば「穆罕默德(muhanmode)」と写しますが、これも預言者ムハンマドこそが最も神に従順で慎ましい人間だということで「穆」の字を冠するのでしょう。清代の著名な中国ムスリム学者、劉智(1724年没)の『天方性理』という漢語著作にも、神が万物創造の最初にムハンマドの霊性の顕現を命じた際、それはこの神命を奉じて「慎ましやかに神から流れ出た(於穆流行)」とあります。

いっぽうで劉智は「穆民」の語を、「イスラーム信徒」という意味と、『魏書』での用例に近い意味、両方の意味を込めて使用していたかもしれません。彼はもうひとつの漢語著作『天方典礼』で「イスラーム信徒」を「穆民」と表記します。アラビア語を知らない、同時代の中国の知識人が、同書を読んで「穆民」の語を目にすれば、きっと上の『魏書』の一節を思い出して、その言葉を「規範に従順で穏やかな人々」あるいは「もともと野蛮だったが中華文明に懐いた人々」と理解したことでしょう。この理解の仕方を予測して、劉智はアラビア語の「ムウミン」を「穆民」と「翻訳」したと思われます。

というのも当時、非ムスリムの中国人たちは、往々にしてムスリムを、暴力的で反社会的で、中華文明に馴染まず頑なに野蛮な風習を守る人々、と見ていました。清朝の官僚たちの中には、そのような偏見を拗らせて、ムスリムの弾圧を公然と唱える者さえいました。そこで劉智は、「穆民」と称することでムスリムを、神の法のみならず中国の規範にも従順で中華文明に教化された人々とし



華寺拱北内部の扁額「穆民師表」とある(筆者撮影)。

て表象し、非ムスリム中国人のムスリムにたいする誤解を解消して信頼を醸成しようとした、と考えられます。

しかし劉智のこの戦略は、清代にどれほど効を奏したかはともかく、中華民国時代になって裏目に出てしまいました。「穆民」の語はいつしか一部の^{ムハンマド}人々から「中国ではなく穆罕默德に従う民」というような意味で理解され、中国ナショナリズムに抵触するようになっていたようです。この「誤解」への反論が、当時の代表的な中国ムスリム学者、王静斎(1949年没)が主宰した雑誌『伊光』第97期(1938年10月刊)の「三民主義は果たして宗教信仰に代わり得るか」という匿名記事に見えます。曰く「〔穆民の〕意味は、“正統信仰をもつ者”である。それはしかし、アラビア語の音を訳したものであって、“ムハンマドの民(穆氏之民)”とは解釈し得ない。仏教徒を“釈迦の民(釈氏之民)”と解釈し得ないのと同じである。というのも、我々はただ“ムハンマドの教えの学生(教生)”と自称するだけであって、決して預言者ムハンマドの民(黎民)ではないからである」と。著者(おそらく王静斎)は、1937年の日中戦争勃発による中国ナショナリズムの高揚を背景として、中国ムスリムが中国にこそ愛国心を持つこと(あるいは、持つべきこと)を訴えたと見えます。中国ムスリムが中国の外側に忠誠心を向けているのではないかとの疑惑を払拭し、彼らにたいする非ムスリム中国人の信頼を更新しようとしたのです。

古くて新しい土葬をめぐる現場から

多文化化する日本。近年、移住者やその家族の老いや死のケアが関心を集めています。ムスリムの土葬もその一つ。火葬が一般的になった社会で安心して死者を送る営みをめぐる課題から、信頼とつながりについて考えます。

『釣りキチ三平』という釣り漫画をご存じだろうか。『少年マガジン』で1973年から83年まで連載されたこの漫画の最終盤のエピソードは異彩を放っている。釣りのシーンがほぼ登場しないのだ。代わりに描かれるのは主人公三平くんの祖父、一平じいさんの葬儀のシーンだ。一平じいさんの葬儀がコミュニティによって執り行われ、最終的に「土葬」される様子が克明に描かれているのだ。

かつて日本で土葬は一般的な葬法であった。しかし近代化にともなう火葬の普及とともに徐々に周縁化・少数化していった。葬儀の担い手も、地域から葬儀業者へと移り変わった。土葬は、多くの人にとって意識レベルでも実践レベルでも身近なものではなくなっていった。

しかし現在、土葬は、積極的に土葬を選択する動きや日本の多文化化にともなう弔いの多様化など、新たな文脈・動向のなかで再び注目されつつある。

その意味で土葬は古くて新しい葬法なのだ。そして、それゆえに土葬は時に論争性を帯びることがある。

大分県別府市に位置する別府ムスリム協会は、2009年頃から土葬墓地取得活動を始めた。墓地の必要性は以前から認

識されていたが、同胞の死がそれを後押しした。5年ほど前からは、隣接する同県日出町での墓地建設計画を進めてきた。手続きは問題なく進むかにみえたが、水質汚染等を懸念する地域住民から反対の声があがり、2023年現在も開設に至っていない。

現場を訪ねたのは2023年6月の事だった。協会の代表や、反対派の意見を取りまとめた町議にお話を伺った。そこで見えてきたのは、一部メディアで見られた「墓地不足に悩むムスリム」と「異文化に寛容ではない地域住民」といった単純な図式ではなく、地域の側にもそれぞれの事情や地域に対する思い入れがあり、突然他所から舞い込んできた土葬墓地建設の話に対する戸惑いのなかで反対の声があがってきたという現実であった。

別府の事例に限らず土葬墓地の新設に向けたハードルは高い。そもそも迷惑（NIMBY）施設でもある墓地への忌避感に加え、既に身近ではなくなった土葬への抵抗感が解きほぐされている必要があるからだ。

それでも実現が不可能な訳ではない。2022年に京都で土葬墓地を開いた韓国系仏教寺院の代表は、開設に先立ち大切だったものの一つは地域との信頼関係だったと語る。墓地開設以前から、代表はじめ寺院関係者は、行事や寄り合い、農作業の手伝いなどを通じて地域と深く関わっていた。土葬墓地開設計画にも反対の声はなかった。地域になじみ、顔が見える良好な関係があったことが開設実現の下地にあったと代表は考えている。

一方、この問題はつながりを生み出してもいた。大分トラピスト修道院の墓地には、現在数名のムスリムが眠っている。この修道院では、協会が墓地を確保できるまでの間、ムスリムの遺体の一時的な受け入れを行っているのだ（写真1）。そして協会と修道院の間を取り持ったのは、墓地用地探しを支援してきた寺院の住職であった。土葬を巡る困難の中で、ムスリムだけでなく、関心を共有する人々がつながりあうなかで課題の解決が図られてきたのだ。

古くて新しい土葬を巡っては、信頼と不信、つながりと断絶、双方が入り交じる。そしてこうした関係性から浮かび上がるのは、日本社会における死の多様化とそれに関連して生じる摩擦や共同性に目を向けることの大切さ、そしてマイノリティの死をめぐる権利の保障などの社会的課題にどう向き合っていくのかを考えていくことの重要性だろう。

いまだ未解決のこの問題が今後どのような展開を見せるのかは、引き続き注意深く見守っていく必要がある。こうした関係性は決して固定的なものとは言えないからだ。



写真1：大分トラピスト修道院の墓地。ムスリムの遺体を一時的に受け入れている。



写真2：別府マスジド

シビルダイアログ・キャラバン 信頼学×保育園×カフェ： 世界のつながりを「自分ごと」にするには

太田(塚田) 絵里奈

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2021年度以降、保育園のコミュニティ・スペースにおいて開催された総括班のシビルダイアログ型イベントでは、家族連れをはじめ多くの来場者を集めてきた。今年度は株式会社ディレクションズの協力のもと、下北沢のカフェギャラリーで展示を行なうことで、新たな展開を模索した。



保育園でのおはなし会(2023年11月)：迫力ある写本挿絵も子どもたちの心を掴んでいた

保育園でのシビルダイアログも三年目を迎えた。2022年度全体集会と併せて開催された、企画展「学知の共創を考える」(2023年2月27日～3月10日)では、過去二年間の企画・展示を振り返り、その成果と課題をめぐるディスカッション型の関連イベントが行なわれた。また、京都大学学際融合教育研究推進センター、こども環境学会の年次大会など、外部で本企画の狙いや成果について報告する機会もいただいた。これらの展示、報告の目的は学究のアウトリーチをめぐり、文字通り「物議を醸す」ことにあったが、企画展の視察に訪れた教育コンテンツな

どを手がける制作会社・ディレクションズの社員の方にお声がけいただいたことから、繁華街のカフェを舞台にしたアウトリーチという、新たな試みが始まった。

「つながりづくり」の大きなステップである園生活を通じて、多様性に満ちた世界を知り始めた子どもたちに、正解のない問いに向き合うことの大切さを伝えたい。その思いから始めた保育園でのシビルダイアログでは、全世界的な視座から「つながり」をキーワードに、人類の歩みを振り返ることを大きな目標に掲げている。今年度はテーマを「物語がつなぐ世界」に設定

企画展「学知の共創を考える」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)



し、ペルシアの民族叙事詩『シャー・ナーメ』に題材を求めた。イランの自然や伝説に思いをはせながら、生まれるまでに250年を要するといわれる霊鳥シームルグのたまごを創作する「研究のお手伝い」をこどもたちに依頼した。

今年度もこどもたちは様々なアイデアや疑問をもとに、お互いに想像を膨らませながら次々と形にしていった。その探求の成果を多くの方に見ていただけるよう、カフェのギャラリースペースを一か月にわたりお借りすることとなった。今回は事前に関係者間で内容を共有し、すり合わせやブラッシュアップを行なうフローであったが、そのやり取りのなかで痛感したのは、研究者として「よい」と思うもの、見せたいものは、必ずしも社会が求めているもの、受け入れられるものとイコールではない、ということである。今回対象になるのはカフェの利用客であり、当然ながら展示を目的として来店するわけではない。そこでこれまでの保育園での展示よりも解説の文



物語から生まれた“設計図”



誕生から成長、復活の秘密を描く



アイデアを形にする

字量を削減し、シンプルで分かりやすさを重視した「つもり」だったが、ディレクションズの担当の方にパネル原稿案を渡したところ、大幅な改編を提案されたことに衝撃を受けた。だがその衝撃こそ、この展示で自分が得たもの一つだったと思う。

いただいた提案は、これまでのように学術的な解説を前面に出すのではなく、こどもたちの製作風景を中心に据える内容で、パネルの配置にも大きく変更が加えられ、展示解説はやや隅に追われた（語弊があるかもしれないが）。だがそれによって、展示全体にまとまりが生まれ、探求するこどもたちの様子からシームルグの物語へと引き込む「動線」が生まれた。研究者がどんなに分かりやすく提示した「つも

り」でも、関心のない方に読んでもらうには、さらに何段階かの工夫が必要になる。今回は保育園と民間企業とのコラボレーションであったが、アウトリーチに際しては、研究者の「自己満足」や「独りよがり」にならないよう、全く異なる分野の方との協働作業という方法は非常に有効であると思う。

我々は研究者として見せたいものがある。ただし、その見せたいものは、そのままの形では社会に広く届かない。アカデミアと社会を「架橋」することが簡単ではないことは、この三年間で実感してきたが、それぞれを異なるものと捉えるからこそ橋渡しの必要と困難が生じるのであり、世界を広げ、自分を知るという学問の原点に立ち返れば、そこに「研究者」と「社会」という

区分は思うほどないのかもしれない。工夫が必要なのは内容ではなく見せ方なのだ。

私はこのシビルダイアログを、自身の研究をより大きな文脈のなかでとらえ直す作業だと思っている。つまり見せたいものを突き詰めていけば、普遍性にたどり着く。そして自分の研究の先にある普遍性とは「世界のつながり」、すなわちこのプロジェクトの核であり、ゴールなのだということを改めて振り返る機会となった。世田谷代田仁慈保幼園の先生方、ディレクションズ、カフェギャラリー関係者の皆様、そしてイランの自然と伝承をもとにシームルグの姿と復活をめぐる秘密を考えてくれたこどもたちに、心から御礼を申し上げる。

カフェ店内でのシビルダイアログ展示（「シームルグのたまご」）：こどもたちの“探究”を中心としたレイアウト



2023年度シビルダイアログ企画

「イスラーム信頼学」ワークショップ & ギャラリー展示

「シームルグのたまご」：ペルシアの叙事詩からつながる物語

【ワークショップ】

2023年10月23日（月）、
24日（火）、27日（金）10:00～12:00

【展示】

2023年12月21日（木）～
2024年1月24日（水）

企画・運営：

太田（塚田）絵里奈・本田直美（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
菊地みぎわ・根本京子（世田谷代田仁慈保幼園）

協力：

タリーズコーヒー下北沢店・株式会社ディレクションズ

シビルダイアログ・キャラバンへの参加を通して

本田直美

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

着任後早々に太田（塚田）絵里奈先生よりポスター作成のご依頼をいただいた時、「信頼学」という言葉は聞き馴染みがなく、どのような研究をするプロジェクトであるのか想像がつかなかったもので、どういった学問であるのか調べることから始まりだった。イスラームという信仰のイメージが強かったのだが、人間関係のつながりが強い文明であることを知り、「つながるってなんだろう？」という疑問点からこのキャラバンへの参加を試みることとなった。

ポスターや展示パネルを作成するにあたって、先生方からお寄せいただいた中世の写本や世界地図は本当に素晴らしく、実際の見聞のみによって描かれたであろう動物や海の生物の図はイマジネーションに溢れていた。眺めているだけでも十分楽しいと思えたのでこれらのイメージを壊すことなく、展示空間にも調和するように配慮しながら展示パネルを作成した。本企画は自分たちが答えを提示して示すわけではなく、ワークショップでの子どもたちの作品や、来場された方々によって最終日に向けて完成を目指していくことがコンセプトなので、自分が完成された形を作成するというよりもそこに人が加わることができるような余地を残しておくことと、地域に密着した施設での開催なので親近感を感じられるようなデザインを目指した。

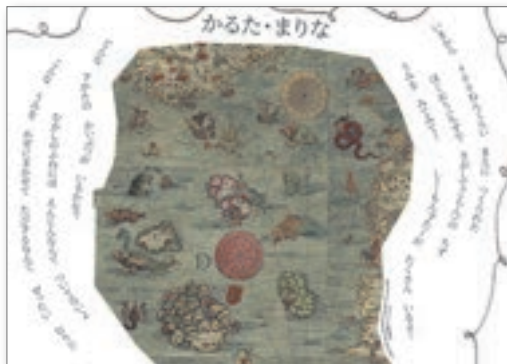
ポスターには子ども用展示パネルとして使用する予定の写本や図案を数種類組み合わせさせたかったので、さまざまなテイストの動物や未知の生物の絵がまとまって見えるように配置する必要があった。中世の地図を中心として置くことでイスラームの地域だけでなく、



2021年度ポスター



2022年度ポスター



子ども向け絵本風パネル



子ども環境学会ポスター

世界全体のつながりからテーマを想像できるようにした。また、2022年度は空と海がテーマだったので、雲や海をイメージできるように波線を加えた。

子ども用の展示パネルは子どもたちに興味を持って見てもらえるように絵本風に仕上げたかった。実際に図書館や書店に赴き絵本を読んでみたが、おおかた挿し絵の横にシンプルに文章が並べられているような構図であり、パネルとして展示するには少し物足りない気がした。そこで文字自体も中世の図案と馴染むように漂っている空気のよう配置することによって、少し読みにくさがるのは否めないが、展示パネルに躍動感が生まれ、テイストが違う絵も同じデザインにすることで会場全体でまとまって見えるようになったのではないと思う。

2021年度と2022年度の企画開催を踏まえ、2023年7月に実施された「子ども環境学会」での発表の場にも参加させていただき、地域とのつながりの中でこの企画がどのような役割を果たすことができたのか改めて考える機会となった。園での開催ではあったが子どもを中心とした教育のための企画というよりも、大人から子ども、子どもから大人へと、双方向に対話をし、疑問を一緒に考えるコミュニケーションの場として自分も一助となっていたのであれば幸甚である。

シビルダイアログは3年目を迎え、今回はカフェギャラリーへと場所を変えての開催となる。また新たな対話の場となり、訪れる人によってどんな「つながり」が生まれていくのか経過を見るのを楽しみにしている。

篠田知暁

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

歴史ネットワーク分析の可能性を探る(?)

アラビア語の伝記史料を歴史ネットワーク分析に利用するためのアイデアが得られないかと、ドイツのマインツで開催されたGrapHNR2023に参加してみたものの…研究の最前線はなかなか遠くにありました。

筆者は近世モロッコ地域の歴史研究を専門としている。イスラーム信頼学のプロジェクトでは、C01班でイスラーム世界の歴史研究におけるネットワーク分析の可能性を、アラビア語の史料を用いて探ることを課題としている。この地域では文書館の整備が遅れたため、外国の文書館が所蔵する文書史料か、文学や思想的な性格のものも含めた叙述史料を中心に用いて研究することになる。

特にローカルな史料に関しては、ウラマーや聖者の伝記集が多くを占めている。これらの文献は、従来の研究では、ある人物の生没年や師弟関係、学んだ事柄に関するやや味気ない記述の中に時折挟まれた興味深いエピソードを探して、当時の人々の習慣や価値観に関する証拠にするという使い方が多かった。つまり、何らかのテーマに関係する逸話を、史料全体の文脈から切り離して分析し、ある時代や地域なり、教団や集団なりの特徴を議論するという形で利用されてきた。そのような使い方は問題である、といたいのではない。ただこの場合、ある史料(群)全体の傾向を、その一部である印象的な事例に基づいて主張するという形になりやすい。また、伝記史料一般、特にマグリブ・アンダルスで発達した

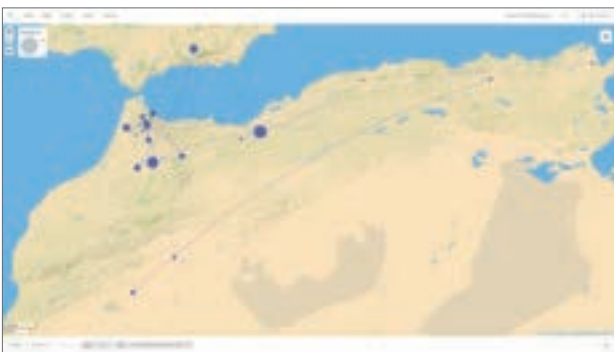
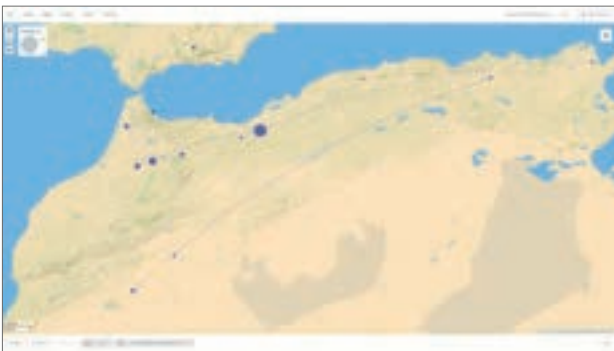
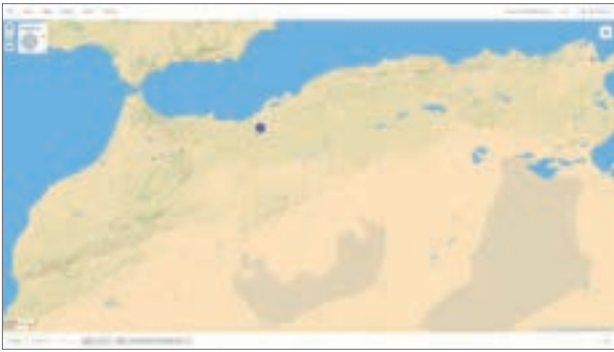
「ファフラサ」とか「バルナーマジユ」と呼ばれる史料類型の記述の多くを占める、膨大な師弟関係の情報を研究に生かすことは難しい。そこで、例えば従来のアプローチと計量的なアプローチと組み合わせることで、ある事例がどの程度代表性を持つのか、といった問題を考慮したより客観的な主張が可能になるのではないかと。筆者が歴史ネットワーク分析に関心を持つようになった経緯を大雑把に説明すると、以上のようになる。

アラビア語史料を用いてネットワーク分析を行う場合、作成するデータにアラビア文字をそのまま使えるかという点を除けば、実はそれほど特殊な要素はない。分析に用いるソフトウェアはフリーで利用可能なものもあるし、チュートリアルなどを利用して段階的に学習すれば、習得もそれほど難しくないように思う。チャレンジングな要素は専ら、何をネットワークの結節点として捉えるか、どのような時にこれらの結節点がつながっているとみなすか、そして、そのようなつながりの総体であるネットワークがある特徴を持っているとき、それは歴史研究ではどのように評価できるのか、といった点にあるようだ。その中でも厄介な問題の一つが、時間をどのように扱うかという点である。

言うまでもないことだが、多くの歴史研究ではある程度の期間における通時的な変化を扱う。もっともある瞬間を切り取ったかのように議論することはあるし、史料の性質によってはそれが有効なこともあるだろう。しかし、例えばアラビア語のウラマーの伝記集からある学統に連なる人々のネットワークを再構築する場合、その構成要素となる人々は、時に何世代にもわたって分布していることだろう。これを「○○朝期の××地方におけるウラマーのネットワーク」として再構成し、中心的な位置や仲介的な位置にあった人々を探すのは、危ういこともある。実際には通時的な人々の結びつきの変化に伴い、ネットワークの構造も変化するからだ。また、ネットワークを情報伝達の経路と考える場合、ある人と人がいつどのようにつながっていたのかを考えないと、正確な分析とならない場合もあるだろう。ネットワークのダイアグラムでは、人々はまるでランケブルでつながっているかのように描写されるが、伝記史料に記載された師弟関係や友人関係が、常に同じ強度で存在していたと考えるのは、やや無理



GrapHNR 2023はドイツ南西部の古都マインツで開催された



スナップショットでグラフの通時的変化を可視化した一例

がある。

このどちらかと言えば理論的な側面での困難に加えて、歴史研究では史料にどれくらい日付が記載されているかという、非常に実践的な問題がある。史料にはそれぞれ個性があるから、細々とした出来事に逐一日付を付しているものもあるかもしれないが、少なくとも筆者が利用している伝記集の場合、登場人物の大半について利用可能な日付は没年などごくわずかだ。そして例外的にしかわからない情報は、計量的な分析には向いていないのである。

加えて、通時的な変化を二次元のグラフで表現することの困難もある。最近のソフトウェアの中には、ネットワークの変化をアニメーションにする機能を備えたものがある。口頭報告では作成したファイルを再生すればよいが、論文に掲載するときはそういうわけにはいかない。一般には一定の期間ごとに画像に作成し（スナップショットと呼ばれる）、説明で補うことになる。しかし、その過程でネットワークの変化に関する多くの情報が失われてしまう面は否めない。

…とこのように、自身に利用可能な史料を用いてネットワーク分析を行うことの困難さに一人で頭を抱えていた筆者は、GrapHNR2023というイベントの案内文を偶然目にして飛びついた。「四次元のグラフとネットワーク：接続されていることのカテゴリーとしての時間と時間性」と題されたこの国際会議に参加したら、何か蒙が啓けるのではないかと考えたのである。実際ここまで（何かわかっているかのようになりに！）延々と書いてきたことも、この機会に勉強したことが中心になっている。

そういう意味では確かに勉強にはなったのだが、2023年7月ドイツのマインツで開催されたこの会議では、実際のところ、ただただ自分の知識と能力の不足を思い知らされることになった。次々と登壇する報告者たちの多くは、これまで意識したことのない課題やアイデアを提起し、名前を聞いたこともなかったツールを利用しながら議論を進めていく。あまりにわからないので、ほとんどメモも取れないありさまだ。こまめに挟まれるコーヒータイトムでの雑談にもついていけない。これは筆者の語学力の問題も大いに影響しているのだが。

大いに失望して普段の任地であるレバノンに戻り、配布資料やわずかなメモをもとに勉強を再開したのだが、手持ちの史料をどのようにデータ化すればよいのか、迷走するばかり。研究の最前線は遠くなるばかりと感じる今日この頃である。

ロヒンギャ史研究の最前線

池田一人
大阪大学

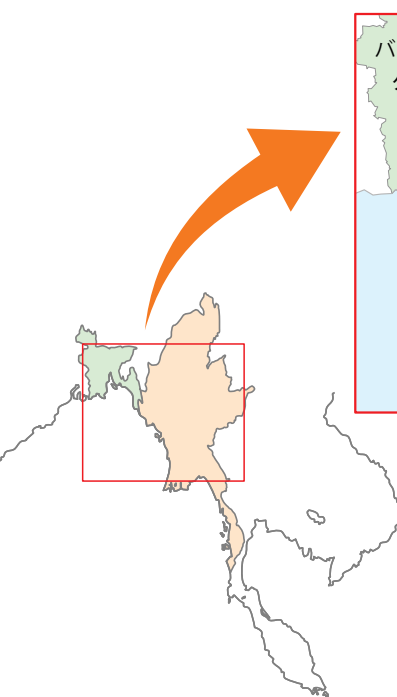
ロヒンギャはミャンマーでは国民を詐称するベンガル人とみなされ、流出したバングラデシュでもチッタゴン地方に由来する人とは認められない。国境のナーフ川兩岸から帰属を否定されるこの人々には、どんな歴史があるのだろうか。

ロヒンギャは2017年の大規模な難民流出で国際社会にひろく知られるところとなった。ミャンマー西部ラカイン州北部は100万人のイスラム居住地域であったが、ミャンマー国軍の弾圧によって短期間からっぽになった。空前の出来事である。大部分は国境のナーフ川を徒歩で超えてバングラデシュのチッタゴン地方へと逃げた。国境の荒蕪地にとつぜん、70万とも90万ともいわれる巨大難民キャンプが出現した。今回の難民流出は2012年のミャンマー国内のイスラム・仏教徒対立事件に端を発していて、1978年と1991年に続いて3回目で最大規模となった。

ロヒンギャはなぜこんなに迫害を受けるのか。このあたりは彼らの土地ではなかったのか。バングラデシュ側では政府はもちろん、これを調査する人類学者にたずねても「バングラデシュの人々ではない」と言う。他方ミャンマー側では、2021年2月の軍事クーデター以降の弾圧ですこし世論に変化

が見えるとはいえ、「ミャンマー国民を詐称するベンガル人」というのがながらくの一般認識である。つまり、ナーフ川兩岸の国家と社会から帰属を否定されているのだ。それはなぜなのか。ロヒンギャにはどんな歴史があるのだろうか。

この素朴な問いかけに答えられる研究は、じつはほとんどなされていない。ProQuestという人文社会科学分野では世界最大級の学術文献データベースがあり、Rohingyaを検索すると13.4万件(2023年11月末現在)がヒットする。しかし、そのうち97%の論文や記事が2012年以降に書かれたものである。多くが時事記事で、関心の対象は難民問題と人道問題であり、ロヒンギャ問題の歴史はほとんど論じられていない。日本の主要紙で1978年当時、その難民流出をロヒンギャ名で報じた新聞はなかった。ミャンマー関係の報道で名高いリントナー(Bertil Lintner)ですら、この名前をはじめてFar Eastern Economic Review誌で使ったのは1991年のことだ。



コックスバザールのラカイン寺 (筆者撮影)



ラカイン寺のお仏壇。闇市から流れた難民支援の品はどこでも見られる (筆者撮影)



日本ではじめてまとまった歴史的検討を行ったのは根本敬・上智大学名誉教授で、2009年のビルマ市民フォーラムの「アリンヤウン」誌上のことである。

ロヒンギヤの歴史研究についてはライダー (Jacques Leider) が第一人者である。彼はミャンマー世界西端のラカイン王朝史を専門として、この地にながら共住するムスリムの歴史も論じてきた。ムラウ朝は現ラカイン州北部に王都があった仏教王朝で、創建の1430年からコンバウン朝ビルマに滅ぼされる1784年まで存続し、インド洋交易の良港であるチッタゴンを支配下においたことから16世紀から17世紀に交易国家として繁栄を謳歌した。こうして、イスラーム・ベンガルの南東辺境地域としてのチッタゴン地方と仏教世界西端にあるラカイン北部は、ムラウ朝のもとで一体地域として統治され、ムスリムと仏教徒の混住地域であった。チッタゴンは18世紀半ばには英領ベンガル、ラカインは1826年以降英領アラカン (ラカインの英語名称) として植民地化され、2つの英領州の境界がナーフ川になる。

ライダーがラカインのロヒンギヤ問題史の起点を置くのは英植民地期である。1820年代後半のラカイン北部は、40年間のコンバウン統治下の反乱と混乱、第一次英緬戦争の戦乱でほとんど無人となっていた。緩慢な人口回復によって経済開発が軌道に乗らず、英政庁はチッタゴン地方からの移住を奨励する。1870年代から本格化した移民により、ラカイン北部マウンドー、ブーティータウン、ヤテーダウン地域の人口はムスリムが卓越することになった。1942年の仏教徒・ムスリム両コミュニティ間での初めての衝突事件には、急激なムスリム移民による経済的社会的軋轢という背景があるとライダーはいう。1948年のミャンマー独立直後、ムスリムのあいだから初めての「ロヒンギヤ」という民族的名乗りが現れた。ミャンマーが民族原理に基礎を置く国民国家となることが明白になったからである。ナーフ川以北には東パキスタンが成立し、1950年代にはこのイスラーム国家への合流を目指すムジャヒッド党が武装闘争を深める。民族をめぐる内戦と交渉という1950年代政治を背景に、同党の懐柔策が1961年に「マユ辺境県」というロヒンギヤ自治区の実現に結実したが、1962年軍クーデター以降は解体していくことになる。

ロヒンギヤ問題の起源をライダーは、1962年以降のネーウィン軍政とともに植民地時代の経済社会要因にも求める。ネーウィン軍政下の展開は紙片の都合上、割愛する。しかし、植民地期から1950年代の解釈についてはいくつも疑問が提起できる。このへんにロヒンギヤ史研究の最前線がある。論点を1つだけ例示しよう。

植民地期のムスリム「移民」についてである。ビルマ人のみならずライダーも、日本を含めた海外研究者も、ラカイン北部のムスリムを基本的にチッタゴン地方からの移民とする。英政庁が彼らを移民として記録したためである。だが仏教徒



コックスバザール近郊のパルワ寺院。彼らはロヒンギヤと同じ言葉話す仏教徒であり、ロヒンギヤ史を考える上で重要な示唆を与えてくれる (筆者撮影)。

は、19世紀初めにチッタゴンや南部から移動しても土着民とされる。なぜか。すでに英人のあたまのなかには「アラカンからは仏教徒のくに、ベンガルはムスリムのくに」という公式ができていて、ナーフ川はその境界だったからだ。この基本認識はセンサスなどの英植民地行政文書に全面採用される。ナショナリズムが基調となる20世紀に入ると、ラカイン人とビルマ人はベンガル系ムスリムを外来化する根拠としてこれをよらんで受容する。研究者はといえば、英語で書かれた「一次史料」の英行政文書上の移民規定を疑わず、そのまま使う。でも当地のムスリムはどうだろう。ナーフ川は上流では歩いて渡れる小川で、お上の行政区分に関心のない在地の人々はその北と南を分けずにむかしから行き来している。仏教徒のくにへやってきた移民という意識はない。

「ロヒンギヤ」を考えるには、前近代からのチッタゴン・ラカイン北部の地域空間と支配者がつくった境界を歴史的にとらえる必要がある。英行政文書の示す人的カテゴリーの性質を史料批判せねばならない。それだけではない。ライダーにはラカインの周縁からミャンマー世界を相対化する数多くの素晴らしい歴史研究がある。しかし1942年事件、48年の名乗り、50年代政治におけるロヒンギヤを考えるためには、ミャンマー世界の中央からラカインの周縁を見つめ直す必要がある。南アジアと東南アジア、国家と境界、周縁と中心、民族、宗教、コミュニティといった諸観念を相対化しないとロヒンギヤの歴史は見えてこない。歴史学的な想像力が掻き立てられる研究課題である。

井堂有子

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所

戦争と食糧

「有事」を煽ることなく、大切な「平時」を守るには

食は国境を越えて生産から消費まで人と人を目に見えない形でつないでいる。

国民のために十分な食糧を確保することは、
多くの国々で政府の責務として期待されてきたが、
戦時には特にセンシティブな問題となる。

2023年10月10日、イスラエル軍が予備役36万人を招集した(ので地上戦は不可避)との記事に衝撃を受けつつ、シリアの予備役の話を書き出した。2007~2010年、私はダマスカスで開発援助の実務に従事していた。当時のシリアは「アラブの春」前夜にあり、2011年3月以降いまだに続く戦争状態に入る等とは恐らく当時の私の周りの誰も想像していなかった。そんな一見「穏やかな日々」のある朝、私は同僚から電話をもらった。

同僚「今日からしばらく出勤できない。昨晚遅くに軍隊から徴兵の呼び出しを受けて、これから〇〇支部に行かないといけない。」

私 「え？ 今から？ こんなに突然？」

その後連絡はしばらく途絶え、ある夕刻、同僚は突然オフィスに姿を現した。「特別許可をもらって一瞬自宅に戻ることができたので、ちょっと挨拶に寄った。ワッラーヒ、イシュタテルクム(みんなに会いたかった)！」彼の背後には車で送りに来たお姉さんが赤く泣き腫らした目で私たちを眺めていた。本当の前線に送られる訳ではなく、「イレギュラーな訓練だけ」とのことだったが、突然の呼び出しと期間不明という「混

乱」に私たちは慄いた。後に、シリアと正反対なのがイスラエルの徴兵制だと聞いた。教えてくれた別の友人は私に問うた。「イスラエルでは年初に予備役対象者全員に日程を知らせるらしい。日常を断絶させずに国民を団結しようとする。シリアは予測不能な突然の呼び出しで国民を脅えさせ恐怖で支配する。どっちが強くなると思う？」(イスラエルの兵役制度に関しては、土井敏邦氏の映画「沈黙を破る」等をご参照)。

中東やアフリカでは戦争が身近にある。戦場となってきた場所ではいうまでもなく、今まさに弾丸が飛び交っていない場所でも、日常の中に戦争の影が付き纏う。戦地から避難してきた人々と彼らを受け入れるホスト社会。戦場に飛んで「義勇兵」となる若者たちとその帰りを待つ親たち。それぞれの社会において圧倒的に大きな軍部の存在。先進国の軍需産業が生み出した商品が流れ着く事実上の大手「市場」となってきた地域全体の歴史。

この地域では戦争と食糧というテーマは切っても切り離せない。シリアとスーダンでの勤務を終えて帰国し、研究テーマにエジプトのパン配給制度を選んだ私は、自分が見つめている研究対象の制度の起源が戦時中にあることは認識していたが、戦時体制のなかで成長してきたことにしばらく気が付かなかった。第二次世界大戦中の割当制度に始まるエジプトの食糧配給制度は、地域全体のプロトタイプとして大規模なタムウィーン(配給)部門を形成するに至ったが、この制度を育て上げたのは「アラブ社会主義」を掲げた国家主導型の戦時統制経済体制であった。日本の学校給食やランドセル等と同様に、戦時の体制が平時に継承された事例であろう。歴史的にも食糧暴動を頻りに経験してきた地域・国であるがゆえに、政府は国民の胃袋を満たすことの重要性を知っていた。食糧の確保をもって国民の信頼をなんとかつなぎとめようとしてきたともいえよう。2000万人を超える大カイロ首都圏の胃袋を満たす重要な役割を背負った小麦の製粉公社はピラミッドの町ギザにあるが、その門の周辺は軍隊で固められている。小麦は守られるべき「戦略的物資」なのである。

もちろん戦争と食糧の密接な関係は中東・アフリカ地域に



アレppo近郊のオリーブ畑(2009年12月、筆者撮影)



限らない。日本の「先の大戦」での死傷者は戦闘による戦死よりも兵站不足による餓死が多かったこともひろく知られている。東京大学の鈴木宣弘教授によると、英国やフランスなどヨーロッパ諸国の歴史教科書には戦時中の飢えについての記述が豊富にあり、人々の食の安全保障をめぐる危機感の基盤を醸成しているという。戦前のヨーロッパ諸国にとって、「新大陸の旧植民地（米国やカナダ、オーストラリア）から安価な穀物を買えばよい」という考え方は、戦中の過酷な食糧難の経験を経て、自国の基本的食糧は国内で確保する、という方針に転換してきた。結果、英国やフランス、ドイツ等でも自給率は高く、余剰分を輸出に回し、いざというときのための「自給力」を維持している。「農業大国」米国はいうまでもない。翻って日本は食の自給率が37%に留まる（鈴木教授の試算では種子と肥料を入れると10%程）。「北の国から」の脚本家倉本聰氏がインタビューで「徴農制を導入したらよいのでは」と答えておられたのを思い出すが、義務でなくとも、いわゆる「関係人口」を増やして、都市の民がいろいろな形で農業に関わるようになれば、おそらくそれが一番の「有事の備え」になるのだろう（自給率向上は自由貿易を即否定するものではなく、バランスの問題であろうと思料する）。

2022年2月以降のウクライナ危機と黒海封鎖によって、多くの中東・アフリカ諸国の主要穀物（特に小麦）の輸入の大半が黒海沿岸からであったことが注目を集めたが、ウクライナとロシアもまず国内自給、その余剰分を輸出に回してきた。ロシアによる侵攻から1か月後であったか、ウクライナの穀物コンサルタント会社が主催したウェビナーを私も日本から視聴した。戦争による国際市場での穀物・肥料・燃料価格の高騰についての質問を受け、報告を務めた同社の農学博士の



イドリブ県高地地帯での放牧の様子（2010年4月、筆者撮影）。2011年12月、ここで戦闘が発生し多数の犠牲が出た（ザーウィヤの虐殺とも呼ばれる）。

十字軍の城跡クラック・デ・シュヴァリエ近郊の村での友人宅の食卓。畑で採れた野菜やオリーブ、手作りのチーズの数々（2010年、筆者撮影）。戦争で彼らも北米に避難した。

代表は、「安い小麦はありますよ、ここウクライナ国内に。あなた方が取りに来られるなら…」と悲し気な表情で答えていた。地雷や爆撃で破壊されたウクライナの畑はどうなっているのか。同様に、内戦前のシリアも（水資源の問題はありつつも）広い空の下で見渡す限りオリーブやピスタチオ、小麦の畑が広がっていたことを思い出す。いまは占領下にあるパレスチナの地もかつて豊穡で肥沃な土地だったと聞く。破壊と再生は何度繰り返されなければならないのか。

冒頭の同僚はゴラン高原手前に配属された後にやつれた表情で戻ったが、家族の温かい食事のお陰か、数日後には血色の良い優しい笑顔に戻っていた。戦争が始まって彼は家族とともに湾岸のある国に逃れ、いまもそこで働いている。

多宗教からなる 都市の近隣関係

守田まどか

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

宗教・民族・言語の面で多様な人々がひとつ屋根の下に暮らした
オスマン帝都イスタンブル。人々はどのようにつながりながら
生きていたのだろうか。都市の街区というマイクロレベルからこの問いに迫る。

ちょうど10年前、私にとってはじめてのイスタンブル留学が終盤を迎えていた。帰国日までカウントダウンが迫るなか、現地でしか閲覧することができない史料を、一頁でも多く、あるいは一行でも多く読もうと必死になっていた。2014年3月に帰国後も、幸い二度にわたるイスタンブルでの長期滞在が叶った。さらにコロナ禍が落ち着いて以降、たびたび短期渡航の機会にも恵まれている。しかし最初の留学当時は、次にいつイスタンブルに戻ってこれるかの保証もなく、てんてこ舞いになっていた。

私が学部生の頃から今までずっと興味を持っているのは、前近代イスタン

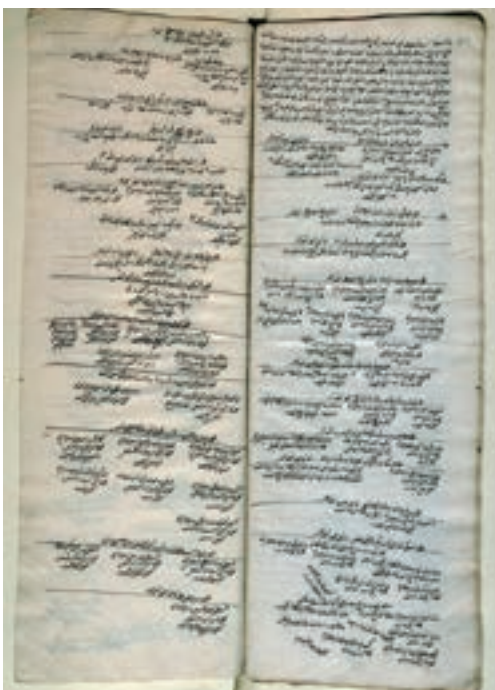
ブルの都市社会の歴史である。現在トルコ共和国最大の都市イスタンブルは、かつてオスマン帝国の都だった。オスマン帝国は歴史上最も長く存続し、最も広い領土を支配したイスラーム王朝であり、宗教・民族・言語の面で多様な人々をゆるやかにまとめつつ成り立っていた。1453年、オスマン君主メフメト2世によるコンスタンティノープル征服後、20世紀初頭にオスマン帝国が崩壊するまで帝都として営まれたイスタンブルにおいても、キリスト教徒やユダヤ教徒からなる非ムスリムが都市住民の少なくとも約4割を占め、近代に入ると5割を超えた。これらの多様な住民が比較的平和裏に共生することを可能にしたしくみのひとつが、都市の重要な構成要素をなした「街区（マハッレ）」という組織である。

オスマン帝都イスタンブルにおいて街区とは、宗教・宗派別に形成された住民共同体であり、都市行政の末端組織としても機能したと理解されている。すなわち、ムスリムやキリスト教徒、ユダヤ教徒の街区は、モスクや教会、シナゴグを中心にそれぞれ形成され、そこに集う信徒集団が個々の街区を構成した。しかし一方で、宗教・宗派別のすみ分けは厳密ではなく、しばしばひとつの街区のなかにムスリムと非ムスリムが混住していたことも知られている。街区において、文化的背景の異なる人々は互いにどのようにつながり、また、様々な政治的・社会的情勢の下で人々のつながり方はどのように変遷したのだろうか？帝国の統治に

社会集団の媒介が不可欠だった前近代において、街区は統治基盤を支える重要な要素であり、街区の果たした社会的役割や行政的機能を歴史的に考察することは、オスマン帝国の多元的な統治構造や国家と社会の関係について理解を深めることにつながる。

このような問題関心のもと、最初の留学以来、私が調査を続けてきたのは、法廷台帳とよばれるオスマン帝国時代の文書史料群である。帝都イスタンブルは司法・民政を担ったカーディーが管轄するひとつの行政区を形成し、そこにはカーディーやその代理人の主宰する法廷が置かれていた。法廷は単に都市民の紛争解決の場であっただけでなく、登記所や公証人役場、さらには命令を告知するための集会場としての機能も有した。法廷が作成または受領した文書の控えが記録されたのが、法廷台帳である。法廷の果たした多岐にわたる機能を反映して、法廷台帳に記録された文書は多種多様であり、都市民の生活にかかわる君主の勅令から都市調査の記録にまで及ぶ。今日に伝わる広域イスタンブルの法廷台帳は約1万冊にのぼり、時期としては16世紀から20世紀初頭にわたる。私はこれまで主に18世紀を中心に調査を進めてきた。そこから浮かび上がってくるのは、宗教的な帰属と地縁に基づく共同意識が完全には一致することはなく、両者が緩やかに重なり合う場としての街区の姿である。多宗教・宗派からなる都市の統治システムとしての街区は、生活レベルにおける宗教・宗派別の信徒集団という枠組みを超えた近隣関係を動機づけていたのである。

「イスラーム信頼学」のキー概念を用いると、オスマン帝都イスタンブルの街区は、多様な住民同士の「水平的な人間関係」と、国家と社会の間の「垂直的な権力関係」が交差する場であったと言える。その歴史的展開を詳細に分析することで、マイクロレベルにおけるイスラーム的コネクティビティの一事例を提示することを目指している。



法廷台帳に記された移住者調査の記録（1745年）。イスタンブルの街区に新たに住み着いた地方出身者について、名前や出身地、移住期間、身元保証人が記されている。街区長を兼ねたモスクの導師が非ムスリムの身元保証人になる場合もあった。Istanbul Bâb Mahkemesi Şer'iyye Sicilleri, vol. 186, 54b-55a.



情報の結節点としてのアラビア語史書を読む

荒井悠太

京大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

歴史書を編纂するためには膨大な情報源が必要である。
歴史にまつわる情報は、著述家の手を経ていかに伝達され、変容し、
繋がってゆくのだろうか。歴史家イブン・ハルドゥーンの
『イバルの書』から考えてみたい。

筆者は、「序説」(『歴史序説』)の著者として著名なアラブ学識者イブン・ハルドゥーン(1332-1406)の生涯、及び彼の主著『イバルの書』の研究を行ってきた。イブン・ハルドゥーンはアラブ名家の子弟としてチュニスに生まれ、前半生をマグリブ、後半生をマムルーク朝支配下のエジプトで送った人物である。イスラーム世界の東西で政治的・学問的研鑽を積んだ彼は、その博識を駆使して人間社会のあり方を包括的に取り扱う独自の学問領域である「人間社会の学問」を構想するに至った。その社会や国家に対するすぐれた洞察ゆえに、彼は「アラブのモンテスキュー」とも称される名声を獲得するに至ったのである。

しかしながら、イブン・ハルドゥーンのすぐれた洞察は決して14世紀の社会に対する直接的な観察のみに負っていたわけではない。「序説」からも明らかかなように、彼は歴史に、すなわち著者自身が身をもって経験することのできない遠く離れた時代・地域の出来事や人々に対しても深い関心を寄せていた。彼はアード族などの伝説上の諸民族、ギリシア、ローマ、ペルシアといった古代の諸帝国、そしてイスラーム出現後における東方のアラブと西方のベルベルに至るまで、当時の人々が知り得た限りの世界の諸民族について、可能な限りの史料を駆使して『イバルの書』にまとめ上げたのである。

このように、著者自身の生きた時代や地域を大きく超える範囲を扱った世

界史的著作は、著者自身の生きた時代や社会に焦点を絞った同時代史に比して、実証研究の観点からみた史料的価値は幾分劣ることを認めざるをえない。しかし一方で、こうした著作は、人々がいかにして過去を認識し、伝達し、編集し、記述していたかを知るうえで大きな手掛かりを提供してくれる。

例えば、古代ローマとカルタゴの戦いであるポエニ戦争(B.C. 264-241, 218-202, 149-146)を伝える一次史料としての信憑性では、イブン・ハルドゥーンがポリュビオスに勝てるはずはない。しかしイブン・ハルドゥーンは、14世紀のムスリムが紀元前のポエニ戦争をどのように認識していたかを如実に語ってくれる。彼によれば、イベリア半島に拠点を築いたカルタゴの将軍ハミルカルとハンニバルは、伝説上のカルタゴの建国者ディードーの末裔で、カルタゴの「王」であり、カルタゴから直接ガリアへ渡ってローマと戦ったとされる。はっきり言って間違いだらけである。しかしカルタゴ(チュニジア)とカルタゴ・ノウア(イベリア半島)の区別もつかないアラビア語の情報源では、これが限界だったのであろう。

そもそも、前近代のアラビア語史書は、君主の治世ごとに区切りを設ける「王朝史」か、ヒジュラ暦に基づく単一の時間軸に合わせて出来事を配列してゆく「年表／年代記」形式を基本とするものがほとんどである。そこでは、王ないし君主というもの自体が存在せず、ヒジュラ暦以前の時代ゆえに年代的秩



ブー・イナーニヤ・マドラサ。イブン・ハルドゥーンが仕えた14世紀のマリーン朝君主アブー・イナーン・ファールスが創設した(フェズ、棚橋由賀里氏撮影)

序を復元することも困難な古代の共和政ローマなどは割愛されるのが当然であった。イブン・ハルドゥーンがポエニ戦争に一節を割き、包括的な記述を試みたこと自体、実はきわめて革新的なのである。

歴史研究者にとって、一次史料の信頼性が重要であることは言うまでもない。しかし、『イバルの書』のように二次的な情報の割合が比較的高い世界的著作の重要性は、それとは別の点にあると思われる。はなはだ怪しげなかたちではあるにせよ、イブン・ハルドゥーンは紀元前に生きた名将ハンニバルの存在を認識していた。情報伝達の形態が現代とは大きく異なる前近代の社会において、情報は時間や空間、そして言語の障壁をいかにして乗り越え、またその過程でいかに変容していったのであろうか。世界史とは、このようにして集積された無数の情報の結節点であり、情報の「つながり」方を示してくれるのである。

第3回イスラーム信頼学 国際会議

“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments” (Mar. 1-3)

石井正子
立教大学

第3回イスラーム信頼学国際会議は、“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments”と題し、2024年3月1日～3日まで東京大学駒場キャンパスを会場として、対面で行います。今年度のシンポジウムはA03班とB03班の合同企画となります。

冷戦終結後の国際協調も束の間、国際社会は激しい武力紛争や戦争、ジェノサイド、大量の難民発生という惨事を目の当たりにしています。その結果、制度に対する信頼はもとより、隣人、コミュニティ、地域社会に対する信頼がゆらいでいます。「ポスト真実」といわれる時代の不安を感じ取っている方も多いのではないのでしょうか。

このような時代状況にあって、このシンポジウムでは「信頼」と「コネクティビティ」をキーワードにして、分断をつないだり、対立する状況のあいだに入る人びとに注目し、その知恵をあぶりだそうと試みます。シンポジウムは、第1セッションと第2セッションが武力紛争や係争が継続している現象に、第3セッションが紛争後の現象に注目するように構成されています。

シンポジウムはポストコロナでの開催ということもあり、参加者の交流の場を設ける工夫もしました。初日のオープニングセッションの後には、パレスチナの惨状に想いを馳せた地唄舞の披露があります（事務局ではこれに「信頼踊り」という通称をつけて準備にあたっているのですが…）。また、2日目のセッション2と3のあいだには、若手研究者によるショートプレゼンテーションとポスター発表の機会も設けました。海外からの参加者にぜひ自分たちの研究を知ってほしい、という若手研究者の積極的な声に応えたものです。

武力紛争や難民がテーマのシンポジウムでは、その否定的側面に光を当てるものが多いかと思えます。このシンポジウムでは、そうした深刻な側面をも十分に考慮したうえで、あえてその状況下で紡がれる「コネクティビティ」に注目し、構築される「信頼」の多様なあり方に迫ります。

The poster features a blue background with a white geometric pattern of interconnected circles and lines at the top. The main title is in large, bold, yellow and white text. Below the title is a photograph of a mosque with a large golden dome. The poster includes detailed information about the conference dates, sessions, speakers, and venue.

The 3rd Islamic Trust Studies International Conference

Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments

1→3 March, 2024

VENUE
The University of Tokyo
Komaba Campus
Building no.12
3-8-1, Komaba, Meguro-ku, Tokyo

Friday, 1 March 15:00-20:00
Opening remarks
Hidenobu Kuriie
Introduction: Conference objective
Masahito Itoh
Keynote Speech
Ussama Makdisi
“Connections and coexistence in an Age of Genocide”
Discussant: Hisayuki Suzuki

Saturday, 2 March 10:00-19:30
1st Session
With whom do you connect?
Intermediaries in (forced-)immigratory and settlement processes
Masahito Itoh, Hisayuki Suzuki, and Shinya Takachi
Discussant: Hisayuki Suzuki
Short presentation & Poster session
2nd Session
Ending impasses? Connectivity amidst conflicts
Nasim Ullah Baloch, Tahara Shinya, Masahito Itoh, and Ken Kanemaru
Discussant: Shinya Takachi

Sunday, 3 March 9:30-12:30
3rd Session
Returning to normal? (Mis-)trust building in post-conflict societies
Masahito Itoh, Masahito Itoh, Ken Kanemaru, and Shinya Takachi
Discussant: Hisayuki Suzuki
Closing remarks
Hidenobu Kuriie

CONTACT
Masahito Itoh
masahito@ipc.kyushu-u.ac.jp

REGISTER FOR THE MEETING NOW!
QR code
<https://connectivity.kyushu-u.ac.jp/>

FOR MORE INFORMATION, PLEASE VISIT OUR WEBSITE
QR code
<https://connectivity.kyushu-u.ac.jp/>

SUPPORTED BY
The University of Tokyo
Masahito Itoh
Masahito Itoh

プログラム

Day 1: Friday 1 March 2024

15:00–20:00

Moderator: **Nobuaki Kondo** (Tokyo University of Foreign Studies)

15:00–15:10

Opening remarks

Hidemitsu Kuroki, Representative of the Islamic Trust Studies (Tokyo University of Foreign Studies/Hokkaido University)

15:10–15:30

Introduction: Conference objective
Masako Ishii, Co-Organizer (Rikkyo University)

15:30–16:20

Keynote Speech

Keynote Speech Chair: **Hidemitsu Kuroki** (Tokyo University of Foreign Studies/Hokkaido University)

Ussama Makdisi (University of California, Berkeley)
“Connections and coexistence in an Age of Genocide”

Discussant: **Hiroyuki Suzuki** (University of Tokyo)

16:30–17:00

Q&A

17:30–18:00

Lecture and demonstration: “Jiutamai”
“Peace-building and Connectivity through Classical Japanese Dance: Jiutamai Dance Performance Tied with Palestinian Embroidery”

Talk and dance performance: **Yukino Hanasaki (Tomoko Murase)** (Tokyo University of Foreign Studies)

Music performance: **Nao Ohara**

18:00–20:00

Welcoming banquet at the restaurant
“Lever son verre Komaba”

Day 2: Saturday 2 March 2024

10:00–19:30

Moderator: **Jin Noda** (Tokyo University of Foreign Studies)

10:00–12:00

Session 1:

“With whom do you connect? Intermediaries in (forced-) migratory and settlement processes”
Chair: **Masako Kudo** (J. F. Oberlin University)

Discussant: **Hideaki Sekino** (Meiji University)

Khatchig Mouradian (The Library of Congress/Columbia University)
“Defend them as you would defend yourselves and your children: Connectivity, Mutual Aid, and Resistance in Ottoman Syria”

Tetsuya Sahara (Meiji University)
“Grass-roots Solidarity versus State Control: Refugees and Bordering Regions in Turkey and Greece”

Susumu Nejima (Toyo University)
“Masjid Otsuka: Trust Building with Japanese People through Volunteer Activities”

12:00–13:30

Lunch Break

13:30–15:00

Short presentation & Poster session

Short Presentation

Noor J. E. Abushammalah (Kyushu University)
“Diasporas at a Crossroad: Silence or Activism?”

Han Hsien Liew (Arizona State University)
“Redeeming the Political Sphere: Ibn al-Jawzi’s Reassessment of Ruler-Scholar Relations”

Sayoko Numata (Tokyo University of Foreign Studies)
“Overall, we are international!: Rethinking Narratives by East Asian-born Tatar Migrants and their Connectivity”

Peter Good (Tokyo University of Foreign Studies)
“The Indian Ocean Trade in Persian Wine: New Perspectives on Cultural Exchange”

Kaori Otsuya (Tokyo University of Foreign Studies)
“Circulation of Arabic Manuscripts on the History of Mecca and Medina in South Asia from the fifteenth to the eighteenth century”

Poster Session

Yuta Arai (Kyoto University)
“How to Translate Different Cultures? Ibn Khaldūn and al-Maqrīzī on Western History”

Sachiko Nakano (Yamaguchi University)
“Trust Building and Connectivity between Muslim Refugees and the Japanese in Interpersonal Relationships: Perspectives from the Japanese as guarantor for a refugee”

Alaa ElSharqawy (Cairo University)
“Postwar (pre-oil shock) Japanese perception of Islam and modernity (Egypt as an example)”

Yuta Hayashi (University of Tokyo)
“Connectivity in Islamic Law: Exploring the Principles of Utilizing Public Goods through the Lens of Medieval Mālikī Jurisprudence”

Naoko Aiiso (Keio University)
“The experienced mariners as the governors of Rhodes in the end of 16th century Ottoman Empire”

Haruka Usuki (Tokyo University of Foreign Studies)
“Connectivity among relatives and families through money transfers: The case of Jordan”

Emiko Sunaga (University of Tokyo)
“Perceptions of Islam in 20th century Japan from the Digital Archive of the National Diet Library”

Hitomu Kotani (Kyoto University)
“How did mosques respond to the recent major earthquakes in Japan?”

Natsuko Saji (University of Tokyo), **Satoru Nakamura** (University of Tokyo)
“Cataloging images of historical materials taken by individual researchers: A case study of Ottoman documents of Bosnia”

Erina Ota-Tsukada (Tokyo University of Foreign Studies), **Jun Ogawa** (University of Tokyo)
“Visualizing the Connectivity of 15th Century Islamic Intellectuals by Using RDF”

15:15–17:15

Session 2:

“Ending impasses? Connectivity amidst conflicts”
Chair: **Kazuya Nakamizo** (Kyoto University)

Discussant: **Shinichi Takeuchi** (Tokyo University of Foreign Studies)

Nurcan Özgür Baklacioğlu (University of Istanbul)
“Komşu Kapıcık: space, connectivity and trustbuilding in divided societies”

Taberez Ahmad Neyazi (National University of Singapore)
“From Local to Digital: Transforming Resistance and Solidarity in India’s Muslim Struggle Against Hate”

Jun Kumakura (Hosei University)
“How China Created the Ethnic Minority Cadres in Xinjiang”

17:30–19:30

“Information exchange banquet” at The University of Tokyo CO-OP Cafeteria

Day 3: Sunday 3 March 2024

09:30–12:30

Moderator: **Jin Noda** (Tokyo University of Foreign Studies)

09:30–12:30

Session 3:

“Returning to normal? (Mis-)trust building in post-conflict societies”
Chair: **Masako Ishii** (Rikkyo University)

Discussant: **Keiko Sakai** (Chiba University)

Matuan Moctar (MARADECA, Inc.), **Abdullah Tirmizy** (Mindanao State University)
“Loss and Rebuilding of Trust and Connectivity: The Case of the Marawi Internally Displaced Persons (IDPs) in Mindanao, Philippines”

Ken Miichi (Waseda University)
“Unraveling Dynamics of Post-Conflict Terrorism: A Case Study in Indonesia”

Dima de Clerck (Université Paris 1/ American University of Beirut)
“Post-Civil War Reconciliations and Challenges in Lebanon”

Yukie Osa (Rikkyo University)
“Bosnian Diaspora’s political activism and international lobby activities and its influence over homeland peacebuilding”

Closing Remarks

Hidemitsu Kuroki (Tokyo University of Foreign Studies/Hokkaido University)

イスラーム経済のモビリティと普遍性



研究代表者

長岡慎介

京都大学

研究分担者

五十嵐大介 早稲田大学

岩崎葉子 アジア経済研究所

亀谷 学 弘前大学

小茄子川歩 京都大学

平野美佐 京都大学

町北朋洋 京都大学

安田 慎 高崎経済大学

研究員

荒井悠太 京都大学

2023年度の活動

A01班では、「イスラーム経済」と呼ばれるイスラームの理念にもとづく経済活動の歴史的实践および現代に再登場したその実践に着目し、そこで見られる特有の経済制度（貨幣・金融、市場、所有制度）の独自性と普遍性を解明することをめざす研究を行っています。そして、そこからイスラーム経済のポスト資本主義的可能性を提起することを射程に入れています。

この班の大きな特徴は、イスラームおよび中東地域を主たる研究対象としている研究者だけでなく、他地域・他時代（アフリカ、東南アジア、南アジア）や様々な学問領域（歴史学、経済学、人類学、考古学）の研究者が本班の共同研究に参画していることです。そのため、他地域・他時代の様々な経済制度との比較の観点からイスラーム経済の特徴をあぶり出すことがこの班の方法論的独自性となっています。

この班の比較研究の基底にあるコア・コンセプトは、この班のタイトルにもなっている「モビリティ」です。今年度は、この班の研究成果として「イスラームからつなぐ」シリー

ズの第2巻『貨幣・所有・市場のモビリティ』を刊行しました。以下では、今年度の研究成果として、本書の冒頭の「総論」で論じられているモビリティが切り開くポスト資本主義的可能性について紹介したいと思います。

*

21世紀に入り、資本主義はそれまでその外部にとどまっていたあらゆるアクターを巧みに吸収し、さらなる膨張と拡大を続けています。そこでは、経済人類学者のカール・ポランニーのいう市場交換が及ばない互酬や再分配といった非市場セクターに資本主義が浸透しているだけでなく、自然や信頼（評判）といった本来、経済外的存在とされるアクターも、金融化の名の下に資本主義の内部に組み込まれていっている状況が見て取れます。こうした資本主義の膨張と拡大は、富める者とそうでない者の格差をさらに拡大させており、それが国家間の紛争や社会の分断をより深刻化させることにつながっています。

こうした資本主義がもたらす弊害を克服するために様々なオルタナティブが提起されてきました。そのオルタナティブとして誰もがまず思い浮かべるのは、共産主義でしょう。しかし、歴史が証明するように、共産主義はこれまで一度も資本主義のオルタナティブを確立したことはありませんでした。その先駆けのソ連も、それに続いた中国も、結果としては資本主義に飲み込まれることで共産主義の理念は骨抜きにされてしまいました。それほど資本主義の力は強いのです。

現代のイスラーム経済も資本主義のオルタナティブを打ち立てることをめざして登場してきたわけですが、それは可能なのでしょうか。以下では簡単にその前向きな見通しを述べてみることにしたいと思います。この班の研究で何度も検討されてきたように、イスラーム経済の「モビリティ」とは、他地域・他時代の様々な制度や現地の慣習を巧みに取り入れ、それをイスラームという包括的な価値体系の中で正当化されるロジックを与えられた上でそれらの制度を実用化するような特性をさしています。この特性には、相反する価値体系の制度をも巧みに回収してしまうような驚くべき吸着性と解毒性があります。このことは、本来、対峙すべき相手である資本主義でさえイスラームの価値体系に取り込み得ることを示唆していると言えるでしょう。

そうであるならば、イスラーム経済が提起するオルタナティブは、これまで構想されてきた様々なオルタナティブとは異なる様相を帯びると思われます。共産主義を含めた従来のオルタナティブ論の大半は、資本主義を「揚棄」して新しい経済システムを打ち立てることに骨を砕いてきました。これに対して、イスラーム経済はその「モビリティ」を駆使し

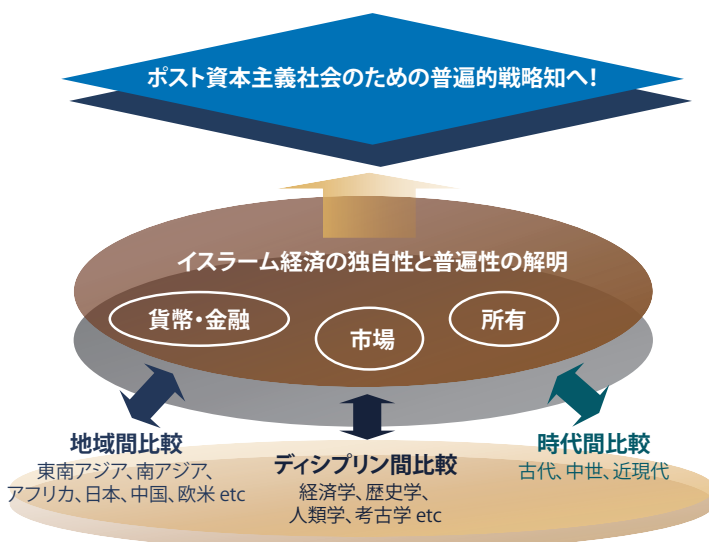


写真2：ショッピングモールにおけるタカーフル（イスラーム型保険）の広告（2023年11月、マレーシア、クアラルンプール、筆者撮影）



写真1：インドネシア銀行博物館内のイスラーム金融に関する特設展示ブース（2023年9月、インドネシア、ジャカルタ、筆者撮影）



写真3：イスラーム金融黎明の地であり、現在でも国内のイスラーム銀行が多数集まるUAE・ドバイのポートサイド地区（2017年3月、UAE、ドバイ、筆者撮影）

て資本主義を取り込んでしまうのです。言うならば、多大な困難と犠牲を払って資本主義を揚棄するのではなく、資本主義の制度の中でイスラームの理念と相反する部分を削ぎ落とした上で、イスラームの価値体系の中で飼いつらしてしまうのです。資本主義の揚棄がいかに難しいかを歴史的経験から痛感している私たちからすれば、その実現可能性は明らかに飼いつらしの方が高いと考えるのは当然ではないでしょうか。

このような言い方をすると、そうした事態は資本主義の「イスラーム化」であり、信仰を共有していない非ムスリムからすれば、それは受け入れがたいものであるという批判が出てくるかもしれません。たしかに、イスラーム文明の歴史的経験や現代のイスラーム諸国におけるイスラーム経済の浸透では、そうした側面がないとは言えません。他方で、イスラームの価値体系の中で飼いつらされた制度が、信仰とは切り離された人類共通のリソースとして活用されていった例も、歴史上数多く存在します。そうした歴史的経験は、単なる一方通行の「イスラーム化」なのではなく、逆に、信仰理念の価値体系の中で実用化が担保されていた制度が、信仰に関係なく誰もが使える制度として「普遍化」したものだと言うことができるのではないのでしょうか。こうしたイスラーム経済の特性を、イスラーム経済の「ユニバーサリティ」と呼んでみたいと思います。そして、この「ユニバーサリティ」が資本主義のオルタナティブをイスラーム経済から構想して実現するための可能性を高める重要な特性だと言うことができるのだと思います。

＊

こうした「ユニバーサリティ」に着目したイスラーム経済のポスト資本主義的可能性が本当にフィージブルな妥当性を持ちうるかどうかについては、『貨幣・所有・市場のモビリティ』をお読みくださる読者の皆様との討議によってさらなる検討をして行きたいと考えています。そうした未来に開けたディスカッションのための基礎インフラとしての役割もこの書物に託したいと思っています。



研究代表者

野田 仁

東京外国語大学AA研

研究分担者

高野さやか 中央大学
 高松洋一 東京外国語大学AA研
 坪井祐司 名城大学
 中西竜也 京都大学
 濱本真実 大阪公立大学
 矢島洋一 奈良女子大学
 和田郁子 岡山大学

研究員

嘉藤慎作 東京外国語大学AA研

国際会議の一場面（オーストリア科学アカデミーにて、2023年、筆者撮影）



2023年度の活動

翻訳を手掛かりに、人々の信頼構築や関係の結び方を考察する本研究班の今年度の活動は、2つの柱から成っていました。1つは、ウィーンでの国際会議開催です。オーストリア科学アカデミーのイラン学研究所を中心に運営している研究プロジェクトCommission for the Study of Islam in Central Eurasiaと、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（B01長縄宣博氏）およびB01班との共催で、“Muddying the Waters: Towards a history of the Caspian Sea”と題する国際シンポジウムを開催しました（2023年9月13日～14日）。アメリカ・ヨーロッパおよび日本から研究者が集まり、カスピ海をターゲットに、この湖が結節点となりつないでいた様々なネットワークを長期の時間軸で検討しました。

ヨーロッパ・中国をも含む東西南北の様々な方向からカスピ海に向かう商人たち、宗教的なミッション、外交使節などがカスピ海をとりまく地で交わり、情報を交換していたわけですが、それは、しばしば言語の転換を伴って行われていました。本研究班の野田報告では、ロシア帝国と中国清朝がと

もに強い関心を持っていたカルムイクおよびカザフ遊牧民に対する政策を手掛かりに、両国がカスピ海周辺の境界をどのようにとらえていたのかを明らかにし、そのイメージの転換—そこに言語的な翻訳も含まれます—を示しました。

もう1つの柱は、昨年度からはじまっているシリーズ「イスラームからつなぐ」第3巻の刊行です。本稿執筆の段階ではまだ校正中ですが、本誌刊行と前後して第3巻も刊行されることになっています。本研究班のメンバーによる各章は以下のとおりです。

第3巻『翻訳される信頼』

総論 ささまざまな人々をつなぐ翻訳の役割（野田仁）

第1部 イスラームの知の移動と多言語への翻訳

第1章 完全人間としてのムスリム君主（矢島洋一）

第2章 『天方詩経』、アラビア語韻文の敢然たる翻訳—19世紀中国ムスリムによる非ムスリムとの信頼関係の構築（中西竜也）

第2部 国際商業における翻訳

第3章 ムガル朝におけるオランダ東インド会社と通訳（嘉藤慎作）

第4章 交易品としてのインドの織物とその「翻訳」（和田郁子）

第3部 帝国の翻訳者

第5章 15世紀末～19世紀ロシアの東方言語の通訳官（濱本真実）

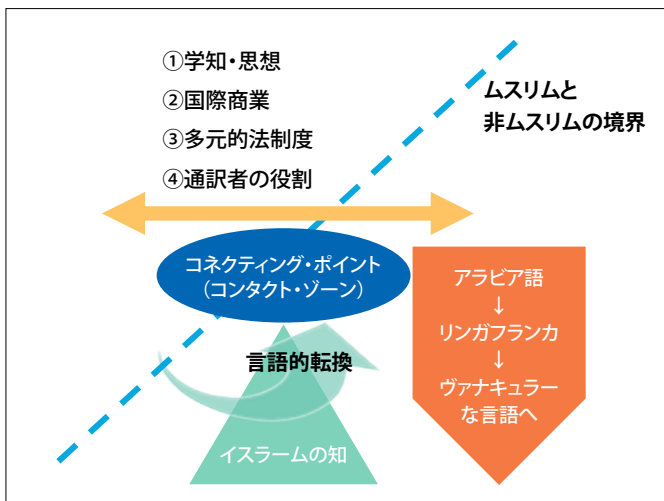
第6章 東南アジアのマレー・ムスリム社会における近代性の翻訳（坪井祐司）

第4部 多元的法体制における翻訳

第7章 多言語社会の中のオスマン憲法（高松洋一）

第8章 ロシア帝国統治下のムスリム遊牧民の慣習法（野田仁）

第9章 インドネシアにおける法の多元性と「翻訳」（高野さやか）





イスタンブルのベシュクタシュ・ハмам (2023年、高松洋一撮影)

イスタンブルのグランドバザールを歩き交う人々 (2023年、高松洋一撮影)

言うまでも無くプロジェクトは継続中ですが、この第3巻には本研究班が「イスラーム信頼学」プロジェクトを通じて試みてきたことがおおむね収まっていると考えてよいでしょう。「翻訳」をキーワードにしたときに、当初考えていたのは、知の伝播、国際商業、多元的法制度の3つの軸だったのですが、そこに実地で翻訳に従事する通訳官・通訳者も分析の対象に加えました。その接続・仲介的な役割をも示すことを意図しています。

具体的な内容についてはぜひ手に取ってご覧いただきたいのですが、第1巻で示したイスラームのひろがりを構成する具体的なネットワークを明らかにする点に加え、コミュニケーション上の齟齬や食い違いにこそ、信頼を見いだそうとする点がポイントになっています。私たちは「翻訳」と言うと、「正しく訳す」、「いかに正しく伝えるか」などと考えがちですが、不等価な翻訳もまた意味を持っているのではないかと考えるのです。多様なひとびとの交わり・関係（ここには歴史上の帝国も入ってくるでしょう）のなかで不可欠な、コネクティビティのツールとしての翻訳の役割から、信頼関係の構造を再検討し、今後の対話の手がかりを探る契機となることを期待しています。

シリーズ刊行のためにメンバー間で打ち合わせを重ねましたが、対外的な活動は限定的でした。今年度のワークショップは、2024年3月14日に開催予定です。本研究班と連携する公募研究（磯貝真澄「18～19世紀のロシアにおけるイスラーム法学の継承をめぐるムスリム知識層の形成」）・C01班との共催で、近代知識人のコネクティビティをオスマン帝国とロシア帝国の事例から検討します。



次年度は、いよいよ集大成の年度となります。引き続き国際的な発信をめざします。シリーズ第3巻で整理した理論的枠組みをさらに検証するために、具体的な交渉の場を比較することも試みるつもりです。



研究代表者

黒木英充

東京外国語大学AA研/
北海道大学スラブ・ユーラシア研
(併任)

研究分担者

池田昭光 明治学院大学

岡井宏文 京都産業大学

長 有紀枝 立教大学

昔農英明 明治大学

中野祥子 山口大学

子島 進 東洋大学

村上忠良 大阪大学

特任助教

太田(塚田) 絵里奈

東京外国語大学AA研

2023年度の活動

A03班の今年度最大の活動は、シリーズ「イスラームからつなぐ」第4巻『移民・難民のコネクティビティ』の執筆と2024年3月1～3日の第3回国際会議“Exploring the Tacit Knowledge of Trust Building and Connectivity amidst Predicaments”をB03班と共同企画したことでした。

A03研究分担者(池田昭光さんは第1巻にて「不信から生まれる信頼?」を執筆)とこれまでワークショップにお招きした研究者の方々から4名に執筆をお願いし、移民・難民関係の研究書としてユニークなものが出来上がりました。

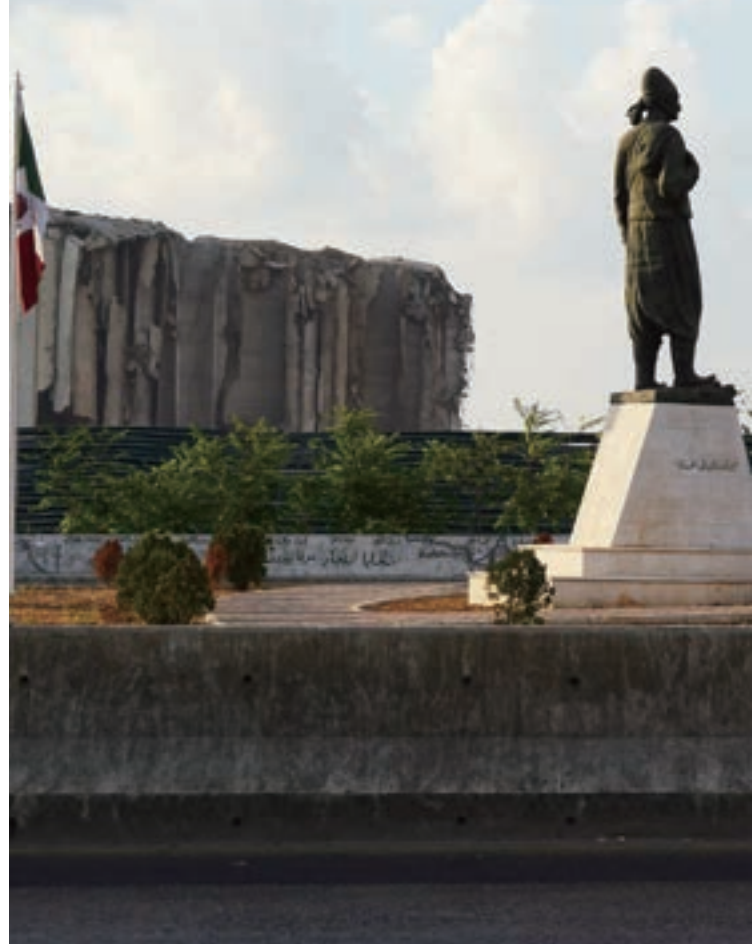
総論(黒木)は、2023年が移民・難民にとって大きな危機の年であるという認識を示し、イギリスの移民(庇護希望者)強制移送法案とパレスチナ(特にガザ)難民に対する民族浄化という二つの危機と、その連関を指摘しました。移民・難民に関する新たな危機の磁場において、本巻各論考の示唆するものは、ますます重要になると考えます。

第I部「身近なムスリム移民のコネクティビティと信頼」は、私たちの身近にいるムスリム移民と周囲の受け入れ側の人々をテーマにします。移民と周囲の人々とは、どのように相互のつながりを作っているのか、異なる角度から切り込みます(子島進・中野祥子・岡井宏文)。何気ない日常の中にコネクティビティの大事なヒントが見出されます。第II部「世界をめぐるムスリム移民のコネクティビティと信頼」は、複数世代にわたる時間軸の中で、現パキスタンからタイへ、ロシアから日本・トルコ・米国へと移動した人々の足跡をたどり、つながりづくりの知恵を探る論考(村上忠良・沼田彩誉子)、現代西欧の主要な移民受け入れ国家フランスとドイツにおける社会から移民へのまなざしと移民側からの関係づくりのミクロ・マクロな動態を描き出す論考(村上一基・昔農英明)が並びます。第III部「難民受け入れと支援の歴史と現在」は中東を舞台に、難民受け入れを国家事業として展開した世界初

の例・オスマン帝国と、現在、人口比で世界最高「難民密度」のレバノンを取り上げます(成地草太・ラーウィア・アツタウィール)。近代帝国における難民受け入れのイデオロギーとしてのイスラーム、現代のレバノン・シリアの国民が親戚のような関係にありながら国民国家同士ゆえの政治・経済的問題が論じられます。第IV部は移民・難民による遠隔地ナショナリズムの問題を、第一次世界大戦期のレバノン・シリアと現代のボスニアを舞台に考えます(黒木英充・長有紀枝)。いずれの章も、移民・難民や受け入れ側の声がふんだんに聞かれる内容となっています。

2023年度のワークショップや講演会は、まず以下①～④をB03班との共催で行いました。

- ①4月15日の佐原徹哉さん(B03)の報告「難民・移民のバルカン・ルート、押し戻しとその背景」は、ヨーロッパ難民危機にて注目されたシリア等からドイツに向かうルートのうち、トルコ・ギリシア・ブルガリア部分のフィールド調査に基づいたものでした。国民国家の境界管理強化と新自由主義経済による労働力流動化・暴力とのはざままで移動を強いられる難民と、移動ルート上の人々の関係を明らかにするものでした。コメンテータに錦田愛子さん(慶應義塾大学)をお招きしました。
- ②上述の二つの危機のうちの一つ、イスラエルによるパレスチナ人への事実上のジェノサイドについて、10月12日の緊急セミナー1「緊迫するパレスチナ/イスラエル情勢



を考える」では鈴木啓之さん (B03) が事態の展開と背景を説明し、手島正之さん (パレスチナ子どものキャンペーン・エルサレム事務所代表) をお招きして現地からの声を伝えていただきました。1週間以内に可能な限り正確な情報を提供しようとするもので、オンラインで多くの参加を得ました。

- ③引き続き11月29日には緊急セミナー2「2023年パレスチナ／イスラエルのカタストロフ〈ナクバ〉の地球的意味を考える：ガザ、ホロコースト、アパルトヘイト」を開催し、臼杵陽さん (日本女子大学) に「ガザ問題への視座」、小森謙一郎さん (武蔵大学) に「反セム主義、反ユダヤ主義——ひとつの提言」、牧野久美子さん (JETROアジア経済研究所) に「南アフリカはパレスチナ／イスラエルをどうみているか」と題する報告をお願いし、佐原徹哉さん (B03) にコメントしていただきました。パレスチナで起こっている問題の構造を抉り出し、世界史の中に位置付ける深い内容のセミナーになりました。これはオンラインにて視聴可能です。 (<https://www.youtube.com/watch?v=I05VUzD86so>)
- ④12月21日にはシンポジウム「パレスチナの歴史と現在：入植者植民地主義と抵抗の100年を考察する」を開催し、鈴木啓之さん (B03) が訳者の一人である『パレスチナ戦争：入植者植民地主義と抵抗の百年史』(ラシード・ハリディー著) の刊行を記念し、共訳者の山本健介さん (静岡県立大学)、金城美幸さん (立命館大学) とともに本書の内容をそれぞれの視点から語り、日下部尚徳さん (B03) と黒木がコメントする機会を持ちました。

B02班との共催で

- ⑤10月21日に青山弘之さん (B02) による報告「シリア人、トルコ人、レバノン人に対する意識調査の結果分析から読み解くイスラームのコネクティビティ」によるワークショップ (シリーズ第6巻執筆内容の検討) を開催し、海外の研究者によるワークショップでは、
- ⑥11月9日にIldus Gubaidullovich Ilishevさん (北大SRC客員研究員) が“Russia-Saudi Arabia: A Transactional Relationship Amid Constraining Realities”と題して、ご自身の外交官としての体験から得られる洞察を交えて過去20年間のロシア・サウジアラビア関係の動態を
- ⑦外部科研費との共催により1月14日にFadi Bardawilさん (Duke University) が“How Can the Arab Left Contribute to the Liberation of the Peoples in the Middle East?”と題して20世紀半ば以降のアラブ左翼思想の今日的意味を
- ⑧1月15日にSari Hanafiさん (American University of Beirut) が“From spacio-cide to geno-cide: About the war on Gaza”と題してガザにおけるイスラエルのジェノサイド行為の構造と背景をそれぞれ話されました。また、
- ⑨非公開ながら、文科省・JICAの難民支援の一環で日本にて勉学に励むシリア人留学生の体験を聞き、次世代のアラビア語教育の在り方について議論するシビルダイアログ「シリア人留学生を囲んで：シリアの現況と日本の次世代アラビア語教育」を1月20日に開催しました。



ベイルート港脇に立つレバノン移民像 (2003年メキシコ・レバノン人クラブからの寄贈) と建築家・造形作家Nadim Karam氏が製作した巨大な像 “The Gesture” (2020年8月4日のベイルート港大爆発後の金属廃材を利用したもの。同氏は1980年代に東京大学大学院工学研究科に留学)。左奥に見えるのは爆発で半壊した穀物用サイロ (2021年9月、筆者撮影)

イスラーム共同体の理念と国家体系



研究代表者

近藤信彰

東京外国語大学AA研

研究分担者

秋葉 淳 東京大学

太田信宏 東京外国語大学AA研

沖祐太郎 九州大学

長縄宣博 北海道大学/東京外国語大学AA研(併任)

馬場多聞 立命館大学

堀井 優 同志社大学

真下裕之 神戸大学

黛 秋津 東京大学

研究員

守田まどか 東京外国語大学AA研

2023年度の活動

今年度は、2024年度に刊行予定のイスラーム信頼学シリーズ第5巻『権力とネットワーク』のための準備と国内外の研究者の知見を取り込むことに努めている。

12月10日、九州史学会と共催で開催したシンポジウム「イスラーム国家体系と国際法」では、比較法制史、国際法学がご専門の幡新大実氏をコメンテーターに迎えて、イスラーム研究の外から本研究班の内容を批判していただいた。きわめて西欧中心的な国際政治史や国際関係史に、本研究がどこまで切り込めるかが、学術変革領域研究としての成果を示すメルクマールとなると考えられ、このような機会は非常に貴重であった。堀井報告はこの分野の第一人者によるアフトナーメと国家体系に関する整理であり、今後の研究の基礎となる手堅いものであったが、アフトの解釈には疑問の余地もあった。近藤報告はサファヴィー帝国から見たイスラーム国家体系についてのものではあったが、国家体系や国際法というものは一方から見て定まるものではなく、双方が認めて初めて成

立するものではないかという厳しい批判を受けた。沖報告は、19世紀エジプトにおいて国際法を受容が、イスラーム法学とも近世的なイスラーム国際関係とも無関係に行われたことを強調したが、文献の叙述のスタイルにはイスラーム法学に近いものが見られるという指摘があった。このように、他分野も含めてさまざまな批判を受けることにより、より広い分野の研究に資する、より意義のある成果につながると考える。

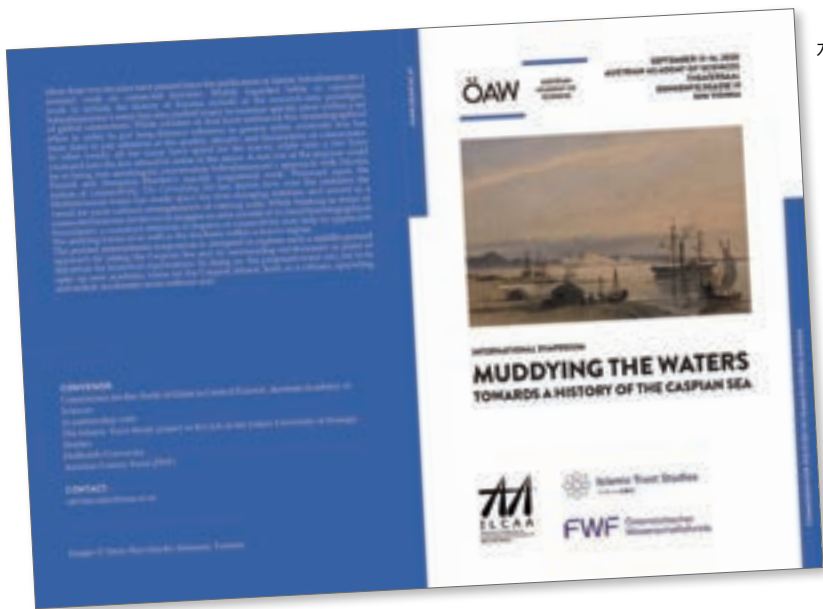
12月17日には国際ワークショップ“The Safavids, the Post-Safavids and the East Indian Companies”をA02班および科研費基盤研究(A)「外交の世界史の再構築：15～19世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制」(研究代表者：松方冬子)との共催で開催した。Good報告はイギリスの東インド会社に対するサファヴィー帝国関係の文書についてのもので、イギリスの文書館にある条約や勅令の内容の分析であった。これらの文書のペルシア語原文の多くは失われており、その史料価値は高い。大東報告は、オランダ東インド会社の政策にかかわるもので、アジア現地の諸君主と合意を結ぶなかで貿易の振興を図るという方針が説明された。合意の文書はオランダ語の翻訳の形で関係の文書館(ハーグ、ジャカルタ)に残っており、アルメニア人やインド商人と結びつくことで、サファヴィー帝国滅亡後もしばらくイランに留まることができたのである。サファヴィー帝国にとっては、国王ではない東インド会社総督は一段格の下がる存在で、発給文書も下位のものに対する勅令が発行された。にもかかわらず、アジアの諸国家とさまざまな交渉を通じて自らの貿易の拡大をはかった東インド会社はアジアにおける重要なアクターであり、その存在を無視することはできない。また、両東インド会社に関する豊富な史料群は、サファヴィー帝国そのものに関する史料と付き合わせることによって、研究の大いなる発展の可能性を示している。

ほかに年度内に3名の研究者を招聘する予定である。まず、12世紀にバグダードで活躍したイブン・アル＝ジャウズィーの政治思想を専門とするHan Hsien Liew氏(アリゾナ州立大学)を招聘する。近年、ポスト・モンゴル期のさまざまな思想に注目が集まる中で、氏が中世の政治思想のどのような側面を示してくれるのか、期待される。東京ではイブン・アル＝ジャウズィーの思想について、京都ではカリフ位について、それぞれ国際ワークショップを開催する予定である。

次にウィーンの中世史研究所のAndras Barati氏である。氏は、イランのマシュハドでオリジナルの文書史料を収集し、サファヴィー帝国期の勅令に関する古文書学的研究をモノグラフの形で発表したばかりである(Brill, 2023)。日本では、彼の新たな研究を披露してくれることになっており、ムガル帝



九州史学会 幡新大実氏



カスピ海史シンポジウム ポスター

国際ワークショップThe Safavids, the Post-Safavids and the East Indian Companies



タシュケント東洋学研究所

国とサファヴィー帝国に共通する格子状のしるしやアフガニスタンのドゥッラーニー朝の勅令を扱って、テーマを広げて論じてくれる予定である。君主の勅令はまさに垂直方向の権力と水平方向のコネクティビティの交差を研究する本研究班への貴重な貢献となるであろう。

最後に、オックスフォード大学のOrçun Can Okan氏である。氏は、オスマン帝国末期から委任統治期にいたる現在の中東の国家の枠組みの形成過程について関心を持っている。彼の最新の論文はInternational Journal of Middle East Studiesに発表され (vol. 55, 2023)、連合国占領下のイスタンブルにおけるシリア人の処遇を扱っている。日本では、トルコ共和国成立史をアラブ地域を含めて検討する報告やトルコにおけるオスマン帝国支配下のアラブ地域研究などについての報告を行う予定である。本研究班は近世から近代の国家体系を主にテーマとしており、第一次大戦後に成立した諸国家については十

分に扱うことができていない。氏の研究はその欠を補ってくれるものと期待される。

以上の招聘のほか、資料調査にトルコに3名、モルドバに2名、ウズベキスタンに1名、イギリスに1名、研究者を派遣し、また、3月までにアゼルバイジャン共和国に1名派遣する予定である。それぞれのテーマにしたがった資料調査を行うことができ、コロナ禍で出遅れた分を取り返す貴重な機会となった。また、9月にウィーンで行われた共催国際シンポジウム“Muddying the Waters: Towards a history of the Caspian Sea”にも1名の研究協力者を派遣した。

来年度は、最終年度にあたり、シリーズの第5巻を含めたさまざまな成果の出版や海外の学会での報告、隣接分野の研究者を巻き込んだシンポジウムの開催などに力を注いでいきたい。



研究代表者

山根 聡
大阪大学

研究分担者

青山弘之 東京外国語大学
飯塚正人 東京外国語大学AA研
池田一人 大阪大学
工藤正子 桜美林大学
後藤絵美 東京外国語大学AA研
菅原由美 大阪大学
中溝和弥 京都大学

研究員

藻谷悠介 大阪大学

2023年度の活動

今年度、わたしたちB02班は主に来年度の叢書刊行に向け、分担者がそれぞれの調査・研究とその成果の発信・執筆に注力してきました。日本国内における新型コロナウイルス関連の大幅な規制緩和に伴い、海外におけるフィールド調査だけでなく、海外の研究者との共同研究活動についても、昨年度以上の進展を見せています。いくつか例を挙げるならば、研究分担者の池田一人さん(大阪大学)はゾーリンアウンさん(元ヤンゴン大学)と共に週に一度研究会を行ない、叢書原稿の主題

写真1: クウェート市中心部のスーク・アル＝ムバーラキーヤの一風景(栗原利枝撮影)



と関連するミャンマーのムスリム・コミュニティについての諸史資料の講読と検討を継続してきました。また、昨年度にB02班で招聘し、国際会議などでご報告いただいたラルさん(UCL)とシャルマさん(UCL)、そしてムハンマドディーンさん(フンボルト大学)には、それぞれ叢書の原稿を執筆いただいております、その日本語への翻訳も協働して進めてきました。

その上で、B02班として成果の発信にも努めてまいりました。まず、8月8日にイスラーム・ジェンダー科研(基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」)と共催で、ワークショップ「イスラーム諸国の「人権」規範形成と国際的な信頼醸成」をオンライン形式にて開催しました。ここでは、今年度からB02班公募研究者として採択された池端路子さん(立命館大学)に同タイトル(副題「イスラーム協力機構の事例から」)でご報告いただき、同科研の研究分担者から小野仁美さん(東京大学)をコメンテーターとしてお招きしました。この報告では、イスラーム協力機構とその下部機関の活動に焦点が当てられ、イスラーム諸国やウラマーがどのように国際的に結びつき、人権概念の再解釈と人権に関する国際的な合意形成を行っているかが検討されました。ジェンダー史を専門とされる小野さんからは、特にジェンダーの問題に関してこれらの機関から発出された声明や宣言について、その解釈の可能性や意義にまつわる多くの示唆に富んだコメントをいただくことができました。

また、10月21日にはA03班と共催のワークショップ「シリア人、トルコ人、レバノン人に対する意識調査の結果分析から読み解くイスラームのコネクティビティ」を、イスラーム信頼学関係者限定という形で開催しました。このワークショップは研究成果としての「イスラーム信頼学」の叢書刊行に向けて、事前に班内で担当者の草稿を読み合わせの上、ワークショップの場で担当者にその概要を報告いただき、質疑応答と議論を通じて、原稿内容のブラッシュアップを目指すというものです。初回の担当者を研究分担者の青山弘之さん(東京外国語大学)にお願いし、同タイトルでご報告いただきました。未刊行の草稿ゆえに具体的な内容については省略しますが、質疑応答では青山さんが収集された調査データの解釈の妥当性や可能性を中心に議論が大変白熱しました。同様の試みについては今年度から来年度にかけて継続し、事前の草稿の読み合わせと議論を重ね、内容を吟味・反映することで、叢書の内容が単なる論文集になるのを避け、全体として統一性をもちつつ、B02班が目指すムスリムのコネクティビティに見られる「思想と戦略」の解明ができるように進めたいと思っています。

そして、11月18日に開催された「イスラーム信頼学」全体集会の一般公開シンポジウムでは、班代表の山根聡が「南アジ



写真2: ラーホールのパードシャーヒー・マスジド内で涼む人たち。酷暑期に大理石の床が冷たく感じられる(筆者撮影)。

写真3: バングラデシュ南東部コックスバザール近郊のバルワ仏教寺院の寝釈迦像(池田一人撮影)



ア・ムスリムの食がつなぎ、育むもの」という題で基調講演を、そして研究分担者の工藤正子さん(桜美林大学)が「移民家族における食とジェンダー：つながりとアイデンティティに着目して」という題で報告をそれぞれ行ないました。講演および報告の具体的な内容については、本ニュースレター内の「巻頭特集2」をご覧ください。信頼学関係者以外の方に多くご参加いただいた場で、「食」と宗教思想の関係性や現代の食料戦略など幅広いテーマから「食」を議論できたことは、B02班の研究課題においても大きな成果であったと言えるでしょう。

さらに、3月16日に東京外国語大学AA研にてB01班と共催で開催予定の国際ワークショップ“Redefining Ottoman Governance: Center-Local Connectivity, Emerging Caliphate Concept, and Contemporary Perspectives”では、研究員の藻谷悠介さん(大阪大学)が“Connecting with Syrians: Muhammad Ali's Rule over Syria in the 1830s”という題目で報告されることとなっています。藻谷さんの報告は、1830年代にシリアを占領・支配したムハンマド・アリー政権が、どのような戦略でもってシリア在地有力者と関係構築を試みたのかを問うという内容で、叢書原稿の内容を下地としたものとなる予定です。このワークショップには海外から気鋭のオスマン史研究者が招聘されており、課題研究の成果を英語で広く発信する貴重な機会を得るだけでなく、そこでの議論を通じて叢書原稿の内容にも磨きがかかることが大いに期待されることです。

本研究課題もあと1年を残すところとなりました。これまで

の成果をとりまとめ、叢書の形でムスリムの思想や戦略を明らかにして行きたいと思っています。それは、対立や紛争の続く現代において、共存を求める手掛かりになる「カギ」を探し求めていくことが「相手を知る」ことになり、そのことが「自らを知る」ことにつながっていくものと信じているからです。現在のムスリム社会で起こっている事象は、地理的、歴史的に異なっているようで、実はムスリムとしての共通した何かがあると考え、それを明らかにしようと取り組んできました。しかしこの研究は、ムスリム社会と非ムスリム社会を分け隔てて考えるのではなく、わたしたち日本人の社会で今起こっている事象とも密接に関係することだと思っています。研究の最終成果をいかに紡ぎだせるか、わたしたちは今その目的に向かって試行錯誤しているところです。



研究代表者

石井正子

立教大学

研究分担者

小副川琢 日本大学

日下部尚徳 立教大学

熊倉潤 法政大学

佐原徹哉 明治大学

鈴木啓之 東京大学

武内進一 東京外国語大学

飛内悠子 盛岡大学

見市建 早稲田大学

研究員

山本沙希 立教大学

2023年度の活動

2023年度は、4月15日にスーダンで国軍と準軍事組織RSF（即応支援部隊）との武力衝突が起こったことを受け、4月27日に緊急講演会「スーダンの軍事衝突：現状、背景、見通し」（総括班共催、於オンライン）を開催するなど、あわただしい幕開けとなった。B03班のメンバーである飛内悠子さん（盛岡大学・南北スーダン地域研究）に研究休暇中のイギリスからご登壇いただき、スーダン出身で東京外国語大学から博士号を取得したアブディン・モハメドさん（東洋大学国際共生社会研究センター）を招き、背景と現状、見通しを報告していただいた。司会と同じくB03班の武内進一さん（東京外国語大学・アフリカ地域研究）が務めた。強い社会的関心もあり、参加者は約200名であった。

その後は、年度末の国際シンポジウム（A03班との共催）の開催を最重要研究活動に位置づけ、来年度のシリーズ本『紛争地域の信頼・コネクティビティ』（東京大学出版会）の出版に備えて、各自がそれぞれの研究を粛々と進める予定であった。

ガザ戦争

しかし、2023年10月7日に始まった「ガザ戦争」は、この状況を一変させた。同日夜23時16分、代表の黒木英充さんから、B03班の石井正子、鈴木啓之さん（イスラエル／パレスチナ研究）、ポスト・ドクトラルフェローの山本沙希さん、総括班特任助教の太田絵里奈さんにメール連絡があった。6時間ほどずっとアルジャズィーラをつなぎ放しで情報収集をしていたが、ネタニヤフ首相のいう今回の「戦争」は、これまでの歴史的経緯からみても1987年のインティファダ、もしくはそれ以上のインパクトを持つものに思われる、という。どこかでオンラインの緊急セミナーを開かないか、という提案であった。

その4分後に鈴木啓之さんから返事が届き、やはり事態の進展がいつもの2倍速で動いている印象を受けている、という。二人の緊迫したやりとりから異例の事態展開を懸念しつつ、翌日には、10月12日に緊急セミナー「緊迫するパレスチナ／イスラエル情勢を考える」（A03班共催、於オンライン）を開催することを決定した。鈴木啓之さんには、5日間の「ガザ戦争」展開の詳細とその特徴をご報告いただいた。また、国際NGOパレスチナ子どものキャンペーン・エルサレム事務所代表の手島正之さんを招き、戦争開始後の現地の人びとの様子を伝えていただいた。参加者は約430人であった。

2023年11月9日にB03班メンバーの見市建さん（インドネシア研究）が、京都大学に招へい研究員として滞在中ソラフディンさん（インドネシア出身）を招いてワークショップ“Extremist Marriage: The Role of ISIS Women in Indonesia”（科研費C「インドネシアにおけるフェミニズム運動とイスラーム」共催、於早稲田大学）を開催した。ソラフディンさんは、インドネシアを中心とする東南アジアの紛争に関する情報発信を行うThe Institute for Policy Analysis of Conflict (IPAC) の記者でもある。インドネシアのISIS信奉者約90人に対するインタビューをもとに、彼らの結婚が女性の役割をどう変化させたかについて、興味深い報告を行った。

その後は、「ガザ戦争」開始時に黒木さんと鈴木さんが怖れたように、一般住民の巻き添えも厭わないハマス壊滅を目的としたイスラエルの攻撃により、大量の犠牲者が出る凄惨な光景を目にすることとなった。社会に与えた衝撃は大きく、2023年11月29日に緊急セミナー2「2023年パレスチナ／イスラエルのカタストロフ〈ナクバ〉の地球的意味を考える：ガザ、ホロコースト、アパルトヘイト」（A03班共催、於オンライン）を開催した。パレスチナでのアパルトヘイトやジェノサイドなどの国際法違反を止められない絶望感が漂うなか、同現象を他地域の同様の事例と比較しながら歴史的に俯瞰し、その解決の糸口を探ろうとする試みであった。2023年12月21日



緊急セミナー「緊迫するパレスチナ／イスラエル情勢を考える」（2023年10月12日、オンライン）

シンポジウム「パレスチナの歴史と現在：入植者植民地主義と抵抗の100年を考察する」(2023年12月21日、立教大学)



シンポジウム「パレスチナの歴史と現在：入植者植民地主義と抵抗の100年を考察する」(2023年12月21日、立教大学)



緊急講演会「スーダンの軍事衝突：現状、背景、見通し」(2023年4月27日、オンライン)

にはシンポジウム「パレスチナの歴史と現在：入植者植民地主義と抵抗の100年を考察する」(於立教大学)を開催した。米国籍パレスチナ人のオピニオンリーダーでもあるラシード・ハーリディー氏の著作『パレスチナ戦争：入植者植民地主義と抵抗の百年史』を鈴木啓之さんが翻訳出版したことをきっかけとして、同書の内容を進行中の戦争にも位置づけて紹介した。B03班メンバーの日下部尚徳さん、代表の黒木英充さんがコメンテーターを務めた。

演劇とのコラボレーション

2024年2月23日には、公開講演会・上演会「占領の囚人たち：演劇によるパレスチナ連帯の可能性」、つづく24日には公開講演会「ガザ・モノローグ：パレスチナの声なき声に」を立教大学で開催予定である。23日のイベントは、昨年度に招へいたイスラエル人の劇作家・俳優・人権活動家のエイナット・ヴァイツマンさんの演劇「占領の囚人たち」の録画を上映し、「ガザ戦争」後の状況に鑑みて新たな解説を加えるものである。昨年度開催のシンポジウム「演劇と抵抗：48/イスラ

エルでパレスチナ人のナラティブを表現する取り組み」(2023年2月18日、於立教大学)におけるヴァイツマンさんの講演記録は、『異文化コミュニケーション論集』第22号から出版予定であり、年度末の刊行に向けて編集作業が進められている。

24日の「ガザ・モノローグ」とは、パレスチナのヨルダン川西岸にあるアシュタール劇場が企画・制作した演劇である。2008年～2009年にガザがイスラエルに空爆された際、ガザの若者31人がモノローグ劇を作ったことから始まった。残念ながらその後、2014年のガザ空爆、今回の「ガザ戦争」を受けてモノローグが追加され、物語が紡がれつづけている。この企画は、ヴァイツマンさんの招へいをきっかけに知りあった演劇関係者から声がかかったものである。演劇は、ことばでは伝えきれない暴力の体験を俳優の身体を通して表現する。武力紛争を鳥瞰図的に捉えるのではなく、それを生きる個人の体験に接近することを可能にする。演劇に研究者の解説にあわせることで、一般のオーディエンスとともに、武力紛争下の生々しい暴力に肉薄する視点を得た。演劇との新たなコラボレーションが研究活動の新たな展開であった。

デジタル・ヒューマニティーズ的手法による コネクテビティ分析



研究代表者

熊倉和歌子

慶應義塾大学

研究分担者

新井和広 慶應義塾大学

石田友梨 岡山大学

伊藤隆郎 神戸大学

後藤 寛 横浜市立大学

篠田知暁 東京外国語大学AA研

永崎研宣 人文情報学研究所

MALLETT Alexander 早稲田大学

研究員

長野壮一 慶應義塾大学

2023年度の活動

今年度、C01班は長野壮一氏を研究員として新たに迎えるとともに、これまで研究員を務めてきた佐藤将氏（金沢星稜大学）を研究協力者に加えた体制を整え、研究活動を進めることとなった。

2021年からはじめた勉強会「もくもく会」は3年目を迎えた。開始当初からオンラインで行われていたこの勉強会は、C01班のメンバーであるか信頼学のメンバーであるかによらず、デジタル人文学に関心を持つ様々な参加者が集う場であった。

勉強会の呼称は、「黙々作業する会」という意味から採られたものであったが、実態としては、情報交換や相談の場として活用され、非常に多くの情報が飛び交ってきた。そこで交わされた情報は、デジタル・ヒューマニティーズ的手法に関する具体的な疑問から、学会報告や論文執筆に関する相談、将来の進路相談、事務連絡や雑談レベルのものまで、多岐に亘るものであった。2021年度には、このもくもく会を週2回のペースで行い、各回の所用時間は3時間と1.5～2時間であった。対面での活動が戻ってきた2022年度には、おおむね週1回3時間、今年度は週1回2時間と徐々に短縮した。この背景には、コロナ状況下の終焉が大きく関与していることは言うまでもないが、一方で、C01班の活動がブレインストーミング的な段階から成果をまとめる段階へと移行したことを意味してもいる。後述する書籍『イスラーム・デジタル人文学』の出版も含め、もくもく会で生まれたアイデアが形となった例も少なくない。共同研究において、コンスタントにコミュニケーションをとることの大切さを実感する。

この他、C01班が行った具体的な研究活動としては、2023年9月に、シリーズ「イスラームからつなぐ」第8巻の刊行に向けた会議を金沢星稜大学にてハイブリッド形式で開催した。2日間にわたり、各執筆者が担当する章の構想を述べ、議論を行った。都合によりすべての執筆者が対面で参加できなかったが、C01班にとっては、これがイスラーム信頼学始まって以来の、初めての対面開催での企画であった。もくもく会ではオンラインで顔を合わせてきたが、対面では初めて会うという人もおり、その点でも対面での会議を実現できた意味は大きかった。また、会議の最後には、佐藤将氏がこれまで進めてきたカイロ旧市街における街路と、金沢市の街路のコネクテビティのあり方を比較・分析する報告も披露され、その翌日には有志で実際に金沢の旧市街を歩きながらコネクテビティ分析の結果を検証するフィールドワークも行われた。

12月には、研究協力者であるMaxim Romanov氏（ハンブルク大学）を招いたワークショップDigital Humanities Winter Days 2023を開催した。2日間にわたって行われたこのワークショップには12名が集まった。内容は多岐に亘り、ここですべてを述べることは難しいが、主としてRomanov氏が携わるKitab Projectで推進するOpenITI Corpus、アラビア文字に適したマークアップ手法としてのOpenITI mARkdown、正規表現、ネットワーク分析について扱われた。特に2日目には、正規表現の演習や、受講者の持つデータで実際にネットワーク図を描いてみるなど、ハンズオンの形式で実践的な知見を取得することができた。また、ハンズオン・セミナーということ



図1：金沢にて初顔合わせの新旧の研究員（筆者撮影）



図2：会議後、宿泊先への帰路に金沢の古い街並みの散策を楽しんだ（筆者撮影）

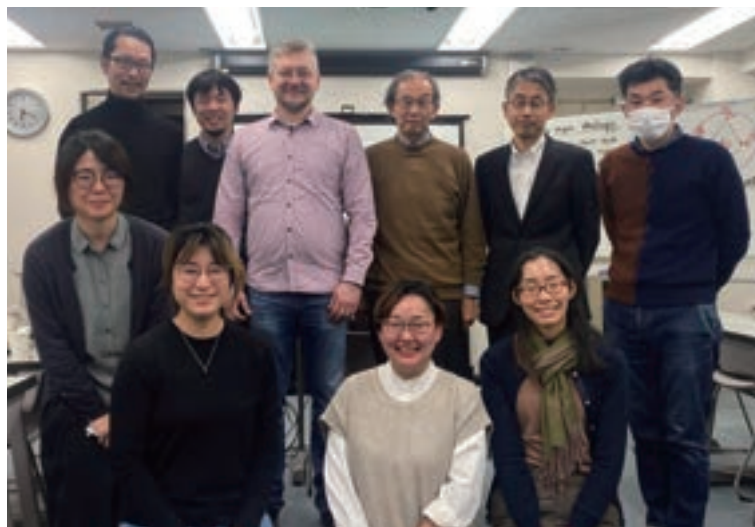


図3：Digital Humanities Winter Days 2023の参加者（太田（塚田）絵里奈撮影）

『イスラーム・デジタル人文学』目次
(サブタイトルは省略しています)

1. イスラーム・デジタル人文学とははじめ	須永恵美子
Column 1 アフガニスタン関連資料の電子化	登利谷正人
2. デジタル化される聖典	竹田敏之
Column 2 オンライン説教	黒田彩加
3. 閉じられたテキストを世界に向けて広げる	塩崎悠輝
Column 3 Unicodeとアラビア文字	徳原靖浩
4. 自動文字認識とテキスト化	須永恵美子
Column 4 マイナー手書き書体のデジタル化	榎橋由賀里
5. 計量テキスト分析	山尾大
Column 5 アラビア語史料を遠読する	荒井悠太
6. TEIガイドラインとOpenITI mARkdown	熊倉和歌子
Column 6 RDF	太田（塚田）絵里奈
7. ネットワークを可視化する	篠田知暁
Column 7 オスマン帝国史とデジタル人文学	河合早由里
8. 五線譜のデジタル化	石田友梨
Column 8 ソーシャルメディアとイスラーム	二ツ山達朗
9. 人工衛星で人間活動を測定する	渡邊駿
Column 9 III F	須永恵美子

で、募集段階から人数を10名程度に設定していたため小規模での開催ではあったが、参加者12名のうち4名がC01班メンバー外からの参加、うち2名が大学院生であり、講師を務めたRomanov氏を囲みつつ、非常に有意義な交流の機会を持つことができた。当初の計画では、C01班のメンバーでRomanov氏が当時赴任していたウィーン大学を訪問し、デジタル人文学に関する知見を得る予定であったが、その計画もコロナ禍により実現不可能となった。今回の招聘は、早稲田大学カタルチェアとの共催であり、その一翼を担うC01班研究分担者のアレックス・マレット氏の尽力により実現することができた。

執筆時点（2024年1月）では未開催ではあるが、3月末にはインドからShweta Sachdeva Jha氏（デリー大学）を招き、18世紀後半～20世紀におけるインドの芸者の移動に関するワークショップを慶應義塾大学三田キャンパスにて開催する予定である。

最後に、今年度刊行予定の書籍、須永恵美子・熊倉和歌子編『イスラーム・デジタル人文学』（人文書院）を紹介したい。

この書籍は、B02班の研究協力者である須永恵美子氏（東京大学U-PARL）の発案により、刊行の計画が進められてきたものである。言うまでもなく、これは「イスラーム」と「デジタル人文学/デジタル・ヒューマニティーズ/DH」の両方をタイトルに含む初めての日本語書籍である。そのような書籍において、執筆者16名のうち、C01班のメンバーが5名を占めていることは特筆に値する。また、C01班の公募研究を進めた山尾大氏のほか、冒頭で述べたもくもく会の参加者も名を連ねる。何より、編者である須永氏自身、もくもく会においてC01班のメンバーとの交流を積極的に図ってきた人物である。この意味において、本書は、イスラーム信頼学という場におけるコネクテビティの結晶であろう。

1. 総括班事務局より

● 総括班事務局の体制

事務局運営：太田信宏、野田仁、熊倉和歌子

事務局員：村瀬智子、臼杵悠、出川英里

事務局所在地：〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所6階(605室)

事務局連絡先：connectivity_jimukyoku@tufs.ac.jp

● 広告媒体

ウェブサイト：<https://connectivity.aa-ken.jp/>

ウェブサイト内ブログへの投稿を随時受付しております。

<https://connectivity.aa-ken.jp/newsletter/newscat/blog/>

メーリングリストを通じてワークショップなどのイベント情報を発信いたします。

X(旧Twitter) :Thiqa project / イスラーム信頼学 (@ThiqaProject)

https://docs.google.com/forms/d/1nng0A7IYyrbcbI5_

[ihcxomZm9Wlf_0r9kSMd2WENCow](https://docs.google.com/forms/d/1nng0A7IYyrbcbI5_ihcxomZm9Wlf_0r9kSMd2WENCow)



● 研究員着任のお知らせ

2023年度、イスラーム信頼学は新たに長野壮一さんをC01班研究員としてむかえました。

長野壮一（慶應義塾大学経済学部・研究員）



近現代フランス社会政策思想史に関心を持っています。これまでは結社（アソシアション）に対する法規制への関心から、団結権および職業組合結成の法認を中心とした19世紀後半の労働政策に専ら着目してきました。「信頼学」プロジェクトにおいてはフィールドを都市政策に移し、地理情報システムやイベントヒストリー分析といった情報学的手法を用いて、両大戦間期の計画化が二次大戦後の住宅政策に与えた影響を割り出したいと考えています。

2. 2023年度に開催した研究集会など（※注記のないものはすべてオンライン開催／一般公開）

全体集会

◆2023/11/18

2023年度イスラーム信頼学／
地域研究コンソーシアム
一般公開シンポジウム

「いま、地域から「豊かな食」と
「つながり」を考える」**総括班** ほか

開会の挨拶：近藤信彰

趣旨説明・登壇者の紹介：黒木英充

基調講演：山根聡「南アジア・ムスリムの
食がつなぎ、育むもの」

報告：

馬場多間「海を渡る食材：中世のイエメン
とインド洋西海域」

砂井紫里（千葉工業大学）「ともに食べる：
福建南部の『僕ら』の清真寺（モスク）にお
ける共食」

工藤正子「移民家族における食とジェン
ダー：つながりとアイデンティティに着
目して」

井堂有子「食糧と戦争経済：つながりと依
存、自律性をめぐって」

コメント：大澤由実（青山学院大学）、南
直人（立命館大学）

全体討論

閉会の挨拶：野町素己（北海道大学SRC所
長）

シンポジウム・国際会議

◆2023/9/13-14

International Symposium

“Muddying the Waters: Towards a History
of the Caspian Sea” **A02**, **B01**

Venue: Theatersaal, Austrian Academy of
Sciences

◆2023/12/1

シンポジウム

「イスラーム国家体系と国際法」
（九州史学会イスラーム文明史部会）

B01 ほか

趣旨説明：近藤信彰

堀井優「近世前半期オスマン帝国のアフド
ナーメと国家体系」

近藤信彰「サファヴィー帝国からみたイス
ラーム国家体系」

沖祐太郎「19世紀末のアラビア語国際法
関連著作における国際法の法源について」

コメント：幡新大実（大阪女学院大学）「国
際法学、比較法制史の視点から」

総合討論

司会：守田まどか

◆2023/12/21

シンポジウム

「パレスチナの歴史と現在：
入植者植民地主義と抵抗の

100年を考察する」**B03**, **A03**

開会の辞：石井正子

報告1：鈴木啓之「ガザ情勢とパレスチナ
の歴史」

報告2：山本健介（静岡県立大学）「ハー
リディー家とパレスチナの歴史」

報告3 金城美幸（立命館大学）「パレスチ
ナを考えるための視座」

コメント：黒木英充

コメント：日下部尚徳

◆2024/3/1-3

イスラーム信頼学第3回国際会議

“Exploring the Tacit Knowledge
of Trust Building and Connectivity
amidst Predicaments” **A03**, **B03**

Day 1 (March 1)

Opening remarks: Hidemitsu Kuroki

Introduction, Conference objective:

Masako Ishii

Keynote Speech: Ussama Makdisi
(University of California, Berkeley)

“Connections and Coexistence in an Age
of Genocide”

Discussant: Hiroyuki Suzuki

Lecture and demonstration: “Jiutamai”

“Peace-building and Connectivity

through Classical Japanese Dance:

Jiutamai Dance Performance Tied with
Palestinian Embroidery”

Talk and dance performance: Yukino

Hanasaki (Tomoko Murase), Music

performance: Nao Ohara

Day 2 (March 2)

Session 1: “With whom do you connect?
Intermediaries in (forced-) migratory
and settlement processes”

Chair: Masako Kudo

Khatchig Mouradian (The Library of
Congress/Columbia University) “Defend
them as you would defend yourselves
and your children: Connectivity, Mutual

Aid, and Resistance in Ottoman Syria”

Tetsuya Sahara “Grass-roots Solidarity

versus State Control: Refugees and

Bordering Regions in Turkey and Greece”

Susumu Nejima “Masjid Otsuka: Trust

Building with Japanese People through
Volunteer Activities”

Discussant: Hideaki Sekino

Short presentation & Poster session

Session 2: "Ending impasses? Connectivity amidst conflicts"

Chair: Kazuya Nakamizo
Nurcan Özgür Baklacioğlu (University of Istanbul) "Komşi Kapıcık: space, connectivity and trustbuilding in divided societies"

Taberez Ahmad Neyazi (National University of Singapore) "From Local to Digital: Transforming Resistance and Solidarity in India's Muslim Struggle Against Hate"

Jun Kumakura "How China Created the Ethnic Minority Cadres in Xinjiang"

Discussant: Shinichi Takeuchi

Day 3 (March 3)

Session 3: "Returning to normal? (Mis-) trust building in post-conflict societies"

Chair: Masako Ishii
Matuan Moctar (MARADECA, Inc.),
Abdullah Tirmizy (Mindanao State University) "Loss and Rebuilding of Trust and Connectivity: The Case of the Marawi Internally Displaced Persons (IDPs) in Mindanao, Philippines"

Ken Miichi "Unraveling Dynamics of Post-Conflict Terrorism: A Case Study in Indonesia"

Dima de Clerck (Université Paris 1/ American University of Beirut) "Post-Civil War Reconciliations and Challenges in Lebanon"

Yukie Osa "Bosnian Diaspora's political activism and international lobby activities and its influence over homeland peacebuilding"

Discussant: Keiko Sakai (Chiba University)
Closing Remarks: Hidemitsu Kuroki

研究会・ワークショップ・セミナー他

◆ 2023/4/15

ワークショップ

「難民・移民のバルカン・ルート、

押し戻しとその背景」 **B03**, **A03**

趣旨説明：黒木英充

佐原徹哉「難民・移民のバルカン・ルート、
押し戻しとその背景」

討論者：錦田愛子（慶應義塾大学）

◆ 2023/4/27

緊急講演会

「スーダンの軍事衝突—現状、

背景、見通し」 **総括班**, **B03** ほか

趣旨説明、イントロダクション、講師紹介：武内進一

講演1：飛内悠子「スーダン概況と軍事衝突に至る背景」

講演2：アブディン・モハメド（東洋大学国際共生社会研究センター）「軍事衝突の現状、背景、見通し」

フロアからの質問と回答

閉会挨拶：黒木英充

◆ 2023/7/27

ブックトーク

「つながりと信頼から世界を

見つめなおす～「イスラームから

つなぐ」シリーズを読む～」 **総括班**

登壇者：黒木英充、野田仁、熊倉和歌子

司会：後藤絵美

◆ 2023/8/8

ワークショップ

「イスラーム諸国の「人権」規範形成と国際的な信頼醸成」 **B02** ほか

池端路子（立命館大学）「イスラーム諸国の「人権」規範形成と国際的な信頼醸成：イスラーム協力機構の事例から」

コメンテーター：小野仁美（東京大学）

◆ 2023/10/12

緊急セミナー

「緊迫するパレスチナ／イスラエル

情勢を考える」 **A03**, **B03**

開会の挨拶：黒木英充

報告：鈴木啓之、手島正之（パレスチナ子どものキャンペーン）

◆ 2023/10/21

ワークショップ

「シリア人、トルコ人、レバノン人に対する意識調査の結果分析から読み解くイスラームの「コネクティビティ」 **B02**, **A03** (限定公開)

青山弘之「シリア人、トルコ人、レバノン人に対する意識調査の結果分析から読み解くイスラームのコネクティビティ」

◆ 2023/11/9

Lecture

「Russia-Saudi Arabia: A Transactional Relationship Amid Constraining Realities」 **A03**

Speaker: Ildus Gubaidulloev Ilishev (Independent Scholar)

◆2023/11/9

Workshop

“Extremist Marriage: The Role of ISIS Women in Indonesia” **B03** ほか

Speaker: Solahudin (Kyoto University)
Moderator: Ken Miichi (Waseda University)

◆2023/11/25

シビルダイアログ

「ガザ「戦争」の背景とパレスチナ問題の世界史的意味」 **総括班**

講師：黒木英充

◆2023/11/29

緊急セミナー 2

「2023年パレスチナ/イスラエルのカタストロフ〈ナクバ〉の地球的意味を考える：ガザ、ホロコースト、アパートメントヘイト」 **A03**, **B03**

開会の挨拶：黒木英充

白杵陽（日本女子大学）「ガザ問題への視座」

小森謙一郎（武蔵大学）「反セム主義、反ユダヤ主義：ひとつの提言」

牧野久美子（JETROアジア経済研究所）「南アフリカはパレスチナ/イスラエルをどうみているか」

コメント：佐原徹哉

◆2023/12/2, 23

ワークショップ

「データ駆動型研究に向けたRDFハンズオン・セミナー」

C01, **総括班**, **公募研究**

Day 1 「RDF 概論」講師：小川潤（人文学オープンデータ共同利用センター）

Day 2 「セマンティックウェブとして描く15世紀人名録のコネクティビティ」（B01班公募研究・成果報告）報告：太田（塚田）絵里奈

◆2023/12/16-17

Workshop

“Digital Humanities Winter Day 2023”

C01 ほか

Lecturer Maxim Romanov (Hamburg University)

Day1 Introduction (Lecture), Hands-on session

Day2 Hands-on session

◆2023/12/17

International Workshop

“The Safavids, the Post-Safavids and the East Indian Companies”

B01, **A02** ほか

Introduction: Nobuaki Kondo

Peter Good (JSPS Fellow/ILCAA) “Stability by Contract?: The East India Company in Persia 1600-1747”

Norifumi Daito (Historiographical Institute, University of Tokyo) “Pursue of Agreement: The Dutch East India Company”

Discussant: Shinsaku Kato

◆2023/12/21-2024/1/24

2023年度シビルダイアログ企画

「イスラーム信頼学」ワークショップ & ギャラリー展示 **総括班** ほか

「シームルグのたまご」：ペルシアの叙事詩からつながる物語

-10月23日・24日・27日

ワークショップ「シームルグのたまご」

-2023/12/21~2024/1/24 展示

◆2024/1/14

Workshop on Contemporary Arab Thought with Fadi Bardawil

“How Can the Arab Left Contribute to the Liberation of the Peoples in the Middle East?” **A03** ほか

Introduction: Kaoru Yamamoto (Keio University), Hidemitsu Kuroki

Keynote Speech: Fadi Bardawil (Duke University)

Comments: Hideaki Hayakawa (Tokyo University of Science)

Comments: Hiroki Okazaki (Asia University)

◆2024/1/15

Workshop

“Genocide in Palestine” **A03**

Speaker: Sari Hanafi (American University of Beirut; International Sociological Association; Advisor, Japan Center for Middle Eastern Studies)

Title: “From spacio-cide to geno-cide: About the war on Gaza”

◆2024/1/20

「データ駆動型研究に向けた

RDFハンズオン・セミナー Part. 2」

C01, **総括班**, **公募研究**

事例提供 出川英里（千葉大学）

史料：19世紀後半エジプトの混合裁判所・判例

講師：小川潤（人文学オープンデータ共同利用センター）

司会・コメント：太田（塚田）絵里奈

◆2024/2/7, 10, 15

「有事と食糧」研究会・オンライン

連続ワークショップ **総括班**, **公募研究**

-2/7

報告者：白杵悠（東京外国語大学）「ヨルダンの食糧不安：包摂と排除をめぐる」
ディスカッサント：清水学（ユーラシア・コンサルタント）

-2/10

報告者：山中達也（駒澤大学）「チュニジアの食糧問題：その歴史と現状」

ディスカッサント：岩崎えり奈（上智大学）

-2/15

報告者：佐藤寛（開発社会学舎）：「紛争と食糧：小麦シフトの罅にはまったイエメン」

ディスカッサント：馬場多聞

◆2024/2/23

イスラーム信頼学緊急企画

「パレスチナは今」『占領の囚人たち』

上映・講演会：演劇による

パレスチナ連帯の可能性 **B03** ほか

「占領の囚人たち」上映①「Prisoners of the Occupation」東京版

「占領の囚人たち」上映②「I, Dureen T. in Tokyo」

鈴木啓之講演

「ガザ・モノローグ」紹介（理性的な変人たち）

◆2024/2/24

イスラーム信頼学緊急企画

「パレスチナは今」「ガザ・モノローグ」

朗読：パレスチナの声なき声に

B03 ほか

ガザ・モノローグI

翻訳監修 渡辺真帆氏によるレクチャー

ガザ・モノローグII

◆2024/2/28

Workshop

“Exploring Connectivity around Medieval Islamic Political Thought and Beyond” **B01**

Introduction: Nobuaki Kondo

Han Hsien Liew (Arizona State University) “I Put My Fear for You above My Fear of You”: Piety and Emotions in Ibn al-Jawzī’s Political Thought”

Ryo Mizukami (JSPS/ILCAA) “Quoting Ibn al-Jawzī for Justification of Imamophilia: Cases of Sibṭ Ibn al-Jawzī and ‘Alī b. ‘Īsā al-Irbilī”

◆2024/2/28

Workshop

“Digital Barbed Wire and Social Control: The Politics of Internet Shutdowns in India” **B03** ほか

Dr. Taberez Ahmed Neyazi (National University of Singapore) “Digital Barbed Wire and Social Control: The Politics of Internet Shutdowns in India”

Discussant: Kazuya Nakamizo

◆2024/3/5

Workshop

“Roundtable: Studies on Iranian History in Japan” **B01**

Introduction: Nobuaki Kondo

Ryoko Watabe (University of Tokyo)

Haruya Shishido (Meiji University, Tokyo)

Peter Good (JSPS/ILCAA)

Norifumi Daito (The Historiographical Institute, University of Tokyo)

Nobuaki Kondo

Discussions: Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna)

◆2024/3/6

Workshop

“Narratives, Knowledge Transmission, and Discourses on the Caliphate in Medieval Islam”

B01, **A01**

Introduction: Nobuaki Kondo

Han Hsien Liew (Arizona State University)

“The Caliphate Will Last for Thirty Years”: Medieval Islamic Political Discourses on a Prophetic Hadith”

Yuta Arai “Historicizing the Caliphate: Ibn Khaldūn’s Interpretation and Description of the Age of al-Khulafā’ al-Rāshidūn”

Discussant: Retsu Hashizume (Kansai University)

◆2024/3/9

Workshop

“Farman, State, and Society in Early Modern Context” **B01**

Introduction: Nobuaki Kondo

Naofumi Abe (Ochanomizu University, Tokyo)

“The Safavid Shrine in Society: The Shrine’s Negotiation with Ruling Powers and Local People in the 18th and 19th Centuries”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Chessboard Ṭughrās on Safavid and Mughal Royal Decrees: A Study in Comparative Diplomats”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Chessboard Ṭughrās on Safavid and Mughal Royal Decrees: A Study in Comparative Diplomats”

◆2024/3/12

Workshop

“From the Mashhad Archives: Eighteenth Century Documents on Iran and Afghanistan” **B01**, **A01**

Introduction: Nobuaki Kondo

Ryuichi Sugiyama (Kyoto Tachibana University)

“Organization and Administration of the Emam Reza Mausoleum during the Afsharid Period”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Illuminating Eighteenth-Century Persian Historical Documents: Royal Decrees of Aḥmad Shāh Durrānī (1747–1772) at the Āstān-i Quds-i Raḏawī”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Illuminating Eighteenth-Century Persian Historical Documents: Royal Decrees of Aḥmad Shāh Durrānī (1747–1772) at the Āstān-i Quds-i Raḏawī”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Illuminating Eighteenth-Century Persian Historical Documents: Royal Decrees of Aḥmad Shāh Durrānī (1747–1772) at the Āstān-i Quds-i Raḏawī”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Illuminating Eighteenth-Century Persian Historical Documents: Royal Decrees of Aḥmad Shāh Durrānī (1747–1772) at the Āstān-i Quds-i Raḏawī”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Illuminating Eighteenth-Century Persian Historical Documents: Royal Decrees of Aḥmad Shāh Durrānī (1747–1772) at the Āstān-i Quds-i Raḏawī”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Illuminating Eighteenth-Century Persian Historical Documents: Royal Decrees of Aḥmad Shāh Durrānī (1747–1772) at the Āstān-i Quds-i Raḏawī”

Andras Barati (Institute for Medieval Research, Vienna) “Illuminating Eighteenth-Century Persian Historical Documents: Royal Decrees of Aḥmad Shāh Durrānī (1747–1772) at the Āstān-i Quds-i Raḏawī”

◆2024/3/13

Workshop/Tobunken Seminar
“Petitions and “Individuals”: First-
Person Narratives and Historical
Agency at Intersections of
Diplomatic, Administrative, and
Legal History” **B01** ほか

Lecturer: Orçun Can Okan (University of
Oxford)

◆2024/3/14

ワークショップ

「近代帝国のなかの翻訳とコネクティ
ビティ」 **A02**, **C01**, **公募研究**

高松洋一「「オスマン憲法」の非トルコ語公
式版：翻訳者、刊行、反応」

磯貝真澄(千葉大学)「人名録が想像させ
るムスリム・コミュニティ：リザエッディ
ン・ブン・ファフレッディン『事績』」

◆2024/3/16

Workshop

“Redefining Ottoman Governance:
Center-Local Connectivity,
Emerging Caliphate Concept, and
Contemporary Perspectives”
B01, **B02**

Introduction: Nobuaki Kondo

Orçun Can Okan (Oxford University) “A
Twenty-first-century Turk Studying the
Ottoman Empire’s “Arab Provinces” and
the Post-Ottoman Arab East: Endeavors
in “Foreign Studies”?”

Yusuke Motani (Osaka University)

“Connecting with Syrians: Muhammad
Ali’s Rule over Syria in the 1830s”

Nobuyoshi Fujinami (Tsuda University)

“A Constitutional Caliphate? An Islamic
Monarch in Ottoman Public Law”

◆2024/3/19

ワークショップ

「周縁的社会集団と近代」

研究交流セミナー第2回

「トルコおよび東アラブ地域における
オスマン帝国の解体と

その影響の管理」 **B01** ほか

オルチュン・ジャン・オカン(オクス
フォード大学)「トルコおよび東アラブ地
域におけるオスマン帝国の解体とその影
響の管理：アンカラ政府のイスタンブル
派遣団(1922-1928)」

◆2024/3/21

Workshop

“Circuits of Travel in South Asia and
Beyond: The Tawa’if and Nautch Girls
in Late Colonial India” **C01**, **A02**

Lecturer: Shweta Sachdeva Jha (Delhi
University)

Discussant: Ayako Ninomiya (Aoyama
Gakuin University)

Moderator: Yuri Ishida

(2024年2月19日現在)

荒井悠太 (あらい ゆうた)

1990年生／京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科研究員／前近代イスラーム史、イブン・ハルドゥーン研究

主要業績：「イブン・ハルドゥーン『イバルの書』に関する総合的研究」(博士學位論文：早稲田大学、2022年)

- **ひとこと**：アラビア語歴史叙述のあり方を、間テクスト性と「編集」の観点からあらたに捉え直す方法論を最近考えています。

五十嵐大介 (いがらし だいすけ)

1973年生／早稲田大学文学学術院／中世アラブ・イスラーム史、マムルーク朝史

主要業績：『中世イスラーム国家の財政と寄進—後期マムルーク朝の研究』(刀水書房、2011年)

- **ひとこと**：2023年に半年のサバティカルを取り、研究に打ち込むことができました。まもなく刊行されるイスラーム信頼学叢書所収の論考「新たな経済が生まれるとき—中世エジプトのワクフ経済」は、その成果のひとつです。

池田一人 (いけだ かずと)

1967年生／大阪大学／ミャンマー史・地域研究

主要業績：「日本占領期ビルマにおけるミャウンミャ事件とカレン—シュウェトウンチャをめぐる民族的経験」(『東南アジア—歴史と文化』第34号、2005年)

- **ひとこと**：拙論であつかったエーヤーワディ・デルタのこの事件は、ラカインの1942年事件(本文参照)と同一時期に発生しました。2つの事件を同平面で考えると新しいミャンマー史が見えてくるはず。ミャンマー史のなかの民族や歴史観ということに関心があります。

井堂有子 (いどう ゆうこ)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニアフェロー／中東地域研究、開発学

主要業績：『胃袋を満たす国家の戦略—戦後日本、インド、エジプトの事例より—』(共著、上智大学イスラーム研究センター、2022年)

- **ひとこと**：近年ますます「食と農」の問題群への関心を強くし、半農半学の生活を夢見ています。

岩崎葉子 (いわさき ようこ)

1966年生／アジア経済研究所／イラン経済制度史

主要業績：『サルゴフリー 店は誰のものか—イランの商慣行と法の近代化』(平凡社、2018年)

- **ひとこと**：商習慣や商人たちのしきたりといったものを、その歴史的な成立経緯や法制度をふまえながら経済学的に分析することに関心があります。

岡井宏文 (おかい ひろふみ)

1980年生／京都産業大学現代社会学部／社会学

主要業績：「瀬戸内から世界に広がるつながり—ある日本人ムスリムの足跡をたどる」黒木英充・後藤絵美編『イスラーム信頼学へのいざない』(東京大学出版会、2023年)

- **ひとこと**：日本のモスクの多彩な活動を追いかけてきました。子育て・教育、社会支援、多文化共生、そして最近ではケアや弔い—。時の流れの中で刻々と変化していくモスクにこれからも注目していこうと思います。

沖祐太郎 (おき ゆうたろう)

1986年生／九州大学／国際法

主要業績：「一九世紀エジプトの知識人による国際法の使用—ムスタファ・カーミルのスーダン協定批判を題材に」(明石欽司、韓相熙編『近代国際秩序形成と法：普遍化と地域化のはざままで』慶應大学出版会、2023年)

- **ひとこと**：ここ数年、日本と中東各国との間で「包括的・戦略的パートナーシップ」と銘打つ合意が結ばれています。政治・経済から教育・文化まで幅広い分野での協力を進めるためのものです。こうした合意がどう実現され

ているのか、研究の手をのぼしたいと思っています。

後藤絵美 (ごとう えみ)

1975年生／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／現代イスラーム研究、ジェンダー

主要業績：『神のためにまとうヴェール—現代エジプトの女性とイスラーム』(中央公論新社、2014年)

- **ひとこと**：最近「イスラームのものでジェンダー平等は可能か」という問いにチャレンジしています。そもそもイスラームとは何か、ジェンダー平等とは何かという基本的問いを含めて、勉強することが山積みです。

篠田知暁 (しのだ ともあき)

1980年生／東京外国語大学／近世西地中海史

主要業績：“The Campaign against Conjugal Bid'a in Northern Morocco during the Sixteenth Century.” *al-Qanṭara* 42 (1): e08. 2021.

- **ひとこと**：史料を読んでいるとそれなりにアイディアは思い浮かび、あれもこれもやってみたくて手を出しているうちにどれも中途半端に…ということ。ちゃんとした研究の核を作りたいです。

飛内悠子 (とびない ゆうこ)

1979年生／盛岡大学／文化人類学、アフリカ地域研究

主要業績：『未来に帰る：内戦後の「スーダン」におけるクク人の移住と故郷』(風響社、2019年)

- **ひとこと**：様々な場所で調査していますが、異なる場所での調査がふいに「つながる」ことがあり、不思議さを感じます。

中西竜也 (なかにし たつや)

1976年生／京都大学／中国ムスリム史

主要業績：“Ma Dexin’s Criticism of Saint Veneration: “Chinese”-Flavored Islam Formed by a Denominational Conflict (Kazuo Morimoto and Sajjad Rizvi,

eds., *Knowledge and Power in Muslim Societies: Approaches in Intellectual History* (Gerlach Press, 2023)

- **ひとこと**：中国ムスリムが、19世紀に西・南・中央アジアから新たに伝わったイスラームの知を如何に「中国的」に受容したかを考えつつ、「イスラーム的」や「中国的」といったカテゴリーの相対化を試みています。

長野壮一 (ながの そういち)

1988年生／慶應義塾大学経済学部研究員
／近現代フランス史、デジタル人文学

主要業績：『欧米圏デジタル・ヒューマニティーズの基礎知識』（共編著、文学通信、2021年）

- **ひとこと**：「方法論の共有地」とも称され、学問分野の垣根を超えた協業を促進するデジタル人文学の可能性を注視しています。

本田直美 (ほんだ なおみ)

1991年生／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員／アート・デザイン

- **ひとこと**：今年度のシビルダイアログ展示のためにアラベスク模様の素材を作成しました。調べていくうちに植物以外にも幾何学模様やカリグラフィーなどの種類もあることを知り、もっと深掘りしてみようと思っているところです。

守田まどか (もりた まどか)

1984年生／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 研究機関研究員／オスマン帝国、都市社会史

主要業績：“Between Hostility and Hospitality: Neighbourhoods and Dynamics of Urban Migration in Istanbul (1730–54).” *Turkish Historical Review* 7, no. 1 (2016): 58–85.

- **ひとこと**：オスマン帝都イスタンブルにおける多宗教共存のあり方に興味を持ち、主に法廷台帳という史料群を調査してきました。最近、これらの史料がどのように作成・利用・保存されたのかについても注目しています。

編集後記

イスラーム信頼学 News Letter No. 4をお届けすることができました。今号では2本の巻頭特集に加え、エッセーをはじめとする様々な企画が盛り込まれています。COVID-19の流行も本格的に終息し、2023年度全体集会ならびに国際会議の双方が完全な対面形式に切り替わるなど、対面での会合や国内外での調査が再び盛んとなってきた様子が窺われます。表紙を飾る写真もまた、前号の表紙とは大きく趣を変え、再開されたフィールドワーク先から届けられた子どもたちの写真となりました。

今号の編集にあたっては、快く執筆をお引き受け下さった方々、イスラーム信頼学事務局をはじめ編集作業に携わって下さった方々、デザインコンビビア様等、多くの方々のご協力を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

(文責：荒井悠太)

Islamic Trust Studies News Letter

イスラーム信頼学 News Letter No.04

2024年3月20日発行

文部科学省科学研究費・学術変革領域研究 (A)
「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：
世界の分断をのりこえる戦略知の創造」
(イスラーム信頼学) 総括班事務局
<https://connectivity.aa-ken.jp/>

[デザイン]
株式会社 デザインコンビビア

[発行]
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
電話 042-330-5600 FAX 042-330-5610
<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

* 本誌の無断転載、複製、複写の一切を禁ず。

表紙解説

表題：かくしごと

撮影場所：フィリピン南部ミンダナオ島のマギンダナオ州 (現 北マギンダナオ州) スルタン・クダラト町 (2022年5月2日)。

撮影者：石井正子

ラマダーン明けの礼拝時に、じっとしてられない子どもたちを写真に収めた。

Facebookに投稿したところ、どのような会話をしているのか想像力をかき立てられる、というコメントが寄せられた。

女の子「なにかくしているの？みせてよ」

男の子「なにもないよー」

という会話が聞こえてきそう、だとか。

町の名のスルタン・クダラトとは、17世紀半ばに現在のフィリピン南部で初めてスルタンの称号を名乗り、スペインに対してジハードを宣言して戦った人物として知られている。現在でもその末裔が同町に暮らし、政治家となって大きな力をもっている。

実はこの町にはモロイスラム解放戦線 (MILF) の本部であるキャンプ・ダラパンが置かれている。フィリピン政府と和平合意を結んでからは公認されているが、反政府勢力であった時にも、同町の政治家たちがその存在を知らなかったはずがない。公然の秘密だったのである。

和平合意以降、MILFは表舞台に出てきた。が、新しい自治政府を創る過程で、今度は彼らがこの町の政治家たちの公然の秘密に向き合わざるを得なくなった。選挙不正である。公然の秘密が不都合な真実になる。MILFはどのように交渉していくのだろうか。その政治的手腕が試されようとしている。

石井正子



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies

